宮崎県文化財調査報告書

第 28 集

昭和６０年３月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 28 集

昭和６０年３月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては、文化財指定のための調査、また、農耕・開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、昭和60年１月４日に県の天然記念物に指定された綾のイチイガシ、及び昭和52年度に調査を実施した川南町の中ノ迫Ａ遺跡、昭和51年度調査の国富町東ノ原地下式１号横穴、昭和55年度調査の野尻町大萩37号地下式横穴についての調査結果をまとめたものです。

本書が、本県の歴史解明のための学術研究上の資料として役立てていただくとともに、社会教育、学校教育の場においても広く活用されることを期待します。

なお、本書の発行にあたり御執筆いただいた平田正一氏、および調査に際して御協力いただいた地元の方々、および市町村教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和60年３月

宮崎県教育委員会

教育長　後藤　賢三郎

例　　言

1. この報告は、宮崎県教育委員会が実施した天然記念物調査、埋蔵文化財緊急発掘調査であるが、野尻町の地下式横穴37号墓については、野尻町教育委員会において調査されたものである。
2. 掲載しているのは、天然記念物１件、弥生時代遺跡１件、地下式横穴２件の合計４件についてである。
3. 執筆者名、調査期日等は下記のとおりである。なお、本書の編集は宮崎県教育庁文化課が担当した。

番号	天然記念物・遺跡名	所在地	調査期日	執筆者
1	綾のイチイガシ	綾町	昭和59年９月26日	平田正一
2	大萩地下式横穴37号墓	野尻町	昭和56年２月９，10，12日	茂山　護
3	中ノ迫Ａ遺跡	川南町	昭和53年２月16，17，18日	岩永哲夫
4	東ノ原１号地下式横穴	国富町	昭和51年12月６日	岩永哲夫

総　目　次

天然記念物

1. 綾のイチイガシ調査 …… 1

埋蔵文化財

1. 大萩地下式横穴37号墓 …… 5
2. 中ノ迫Ａ遺跡 …… 21
3. 東ノ原１号地下式横穴 …… 40

（付）昭和59・60年度埋蔵文化財発掘調査一覧 …… 54

綾のイチイガシ

例　　言

本報告は、綾町指定天然記念物であるイチイガシの県指定申請に伴い、昭和59年9月に県文化財保護審議委員である宮崎大学名誉教授平田正一氏が現地調査を実施した時の報告書である。

なお、イチイガシは昭和60年1月4日付けで県指定天然記念物となった。

1. 綾のイチイガシ

所在地　　東諸県郡綾町大字北俣2610番地4

所有者　　東諸県郡綾町大字南俣692番地

宮　永　享　子

現　状

このイチイガシは綾城址本丸の高台から西へ約600ｍ隔たり、これから続く標高60ｍ程の平たんな台地の一角にある。イチイガシは綾町北俣地区から綾神社に通ずる参道にあたる小道の脇に接して立ち、東側は道を隔てて平らな桑畑に続いて民家がある。西側は急傾斜地で立木の繁る山地となっている。本樹は東からの遠望では、夏期は下部の３分の２が桑や立木にさえぎられて樹冠の先端部が見られるのみで、西側も立木の樹そうからわずかに盛り上って見え、巨木の全樹形が見えにくい位置にある。

昭和59年９月26日測定の樹高は、西側の地際部から18.10ｍ、目通り幹周囲は6.70ｍ、地際部測定の根廻りは13.20ｍに達し、樹冠の枝張りは、東側8.80ｍ、西側11.50ｍの計、東西20.30ｍ、北側7.40ｍと南側10.50ｍの計、南北17.90ｍである。このイチイガシの推定樹令は次の調査報告に準拠して算定し、700－800年を経過したものとされた。

宮崎大学農学部林政学研究室の三善正市教授が宮崎県内における代表的なカシ類の巨木の樹令を実測調査した結果、イチイガシはブナ科の一般樹種８種の中では最も長寿を保って巨木となり、幹の直径100㎝で400年を経過し、アカガシやウラジロガシはこれに次いで径70㎝を最大古木として、樹令は300年を経過していると報告している。この測定値から、本イチイガシの目通り幹周囲6.70ｍから求めた直径は2.13ｍとなり、その樹令は852年と計算される。樹幹の偏心生長を考えても700－800年と推定された。

枝下の直幹部は約５ｍ位であるが内部は完全に空洞化している。空洞内は地際部で長径2.40ｍ、短径1.00ｍあり、木質部を欠除している。空洞の樹皮部は10－15㎝の厚さの薄層部となり、内面は細かく表面が亀裂化し、木質部は黒色の分泌物で覆われ、一部には硬質木材腐朽菌の子実体の発生も見られるが著甚な被害はない。空洞は東南部で樹皮上下に割裂して、大人が容易に出入りできる間げきを作っている。割裂した樹皮は癒合肥大して柱状化し樹幹を支えている。空洞の地際部には長年の生育過程を示して、土中の石（15×15×25㎝）を抱

いた根が伸び上っている。イチイガシの幹の地際部の立ち上り部は板状根化して巨幹を支えるのが通常であるが、本樹ではほとんど見られない。空洞の主幹は上端部で東・西・北の3方向に3本の分枝幹が伸長して本樹の樹冠部を作っている。北側枝幹は北風のためか枝端に葉をつけず枝を露出して樹勢の衰弱を見せている。東、西の両枝幹は発育旺盛で枝葉の繁茂した樹冠を作っている。このイチイガシの立地は高台のため風通しが良好で枝幹上に着生植物が見られず、わずかに太いテイカカズラが1本登はんするのみである。本樹の樹勢は樹幹の空洞化はあるが全般的に安定した良好な状態におかれている。

本樹の北側に並んで1本のヤマザクラがあり、胴廻り1.45m、高さ3mの樹幹であるが老令化してその先端はわずかな枝をつけるのみである。本樹と比で10m余り離れて、本樹より更に巨幹のイチイガシが道脇にあったという。このイチイガシを囲む西側の山林は昔から薪炭林として伐採が繰り返された二次林となっている。林内は高木層にツバキ，アラカシ，イヌノキ，コジイ，ヤブニッケイ，カゴノキがあり樹冠が発達して薄暗い。低木層の発達は極めて悪く、ネズミモチ，イチイガシ，ヒサカキ，ニシキギ，イズセンリョウ，オカメザサなどがある。草本層はノシラン，カラタチバナ，ツルコウゾ，フウトウカズラがわずかに見られ、地表は露出している。

由来　このイチイガシの歴史的背景についての綾町教育会からの申請文の主旨は次の通りである。

室町時代、8代将軍義政の頃日向の国に勢力を張っていた伊東氏の都於郡第12代領主は伊東尹祐であった。領主の2人の側室に生まれた男子の相続争いから、尹祐は重臣、綾城主長倉若狭守と崎の田の垂水城主垂水但馬守らのかん言をしりぞけたことから不和となった。生命の危機を感じて綾城に立てこもった両将を尹祐は軍勢をもって誅し、自刃せしめた。時に永正5年（1510年）、今から474年前のことであった。尹祐は家臣の霊を弔い、また叔父祐邑を殺した時領内に天変地異があったので、その霊などを弔うために明見神社を勧請したさい境内および綾城の一角にイチイガシを植栽したといわれる。本樹の所在地は綾町野首の宮永氏の屋敷跡で戦国の昔は武家屋敷があったといわれている。後年武士達はこのイチイガシを神木として注連縄を張り崇拝してきたと伝えられている。今日でも村人は株本にほこらを祭り神木としてあがめ、民衆の中で生き続けた記念木である。本樹の植栽についての確実な歴史的記録があるわけではなく、また推定樹令と植栽時からの経過年数との間の開きも大きいが、昔からこの地に口伝として残されたものである。

他方、植物生態学的に見れば、宮崎県は典型的なシイ・カシ類の照葉樹林地帯に入り、こ

の台地にあった森林が開拓に伴ってイチイガシを含む林分が一角に残存し、後世になって老木として民衆の信仰対象としての神木となって伝えられたものとも考えられる。一般に県内におけるイチイガシの自然林は内陸の低地から標高600 m 位までの丘陵地から山地などの谷部から扇状地の肥沃で適潤の土壌に発達している。現地はイチイガシ林の分布域にあるが、台地の一角で個立木となり、乾燥と風のため好適の環境下にないため、伸長生長がやや劣り、樹形も傘形となっている。

保存の要件　宮崎県内に現存する巨樹老木を登録した宮崎県発行の「宮崎の古木」によれば、このイチイガシは目通り幹囲は 6.70 m で県内では最大のものであり、推定樹令も700－800年で本樹種中の最高樹令である。樹高においては県内のイチイガシ中、都城市庄内小学校及び同市諏訪神社、高岡町八坂神社の３樹はいずれも35 m で、本樹の 18.10 m を超えるが、幹周囲は 3.50 m 前後で樹令400年前後の若令のものである。以前日本最大のイチイガシと称され国指定天然記念物として保護されていた国富町本庄の稲荷神社のものは、樹高34 m、目通り幹周囲 7.60 m、樹令 1,000 年と推定されていたが老衰のため枯死した。綾のイチイガシはこれには及ばないが県内における後継の高齢樹である。

宮崎県が日本の西南暖地に分布するシイ・タブの照葉樹林地帯に入り、この林分構成の樹種中最高齢を保持するイチイガシの県下における代表樹である。綾の本樹は貴重な学術参考品として天然記念物に指定し保存することを適当と認める。

なお、既に綾町教育委員会は昭和57年10月１日綾町の天然記念物に指定して保護を加えているので、今後の保護に当って懸念されることはない。ちなみにイチイガシの国指定天然記念物は熊本県玉名郡南関町字笛鹿のものが１件あり、九州内の県指定件数は福岡県３件、大分県３件、熊本県３件、鹿児島県１件がある。綾のイチイガシは、胴廻りにおいて他県のもの５件より小さく、また樹高においてはいずれも20 m を超える他県のものに及ばない。

参　考　文　献

1. 文化庁　天然記念物緊急調査　植生図・主要動植物地図　大分県　1975年，鹿児島県 1975年，熊本県　1976年，福岡県　1977年.
2. 本田正次・吉川　需・品田　穣　天然記念物辞典　第一法規株式会社 351 総頁，1971年.
3. 宮崎県土木部観光課　宮崎の古木　75総頁　1971年.

東側（桑畑）からみた樹冠

根まわりの状況

西諸県郡野尻町

大萩地下式横穴37号墓調査報告

ŌHAGI

例　　言

1. 本報告は西諸県郡野尻町教育委員会が実施した野尻町大萩地下式横穴37号墓調査報告である。
2. 調査は昭和56年２月９日から２月12日まで実施し、宮崎県総合博物館学芸課主任茂山　護（現・日ノ影町立八戸中学校教頭）が担当した。
3. 本編の執筆・遺物の実測・トレースは茂山　護が行った。

目　　次

1. 調査の経緯 …… 5
2. 遺　　構 …… 7
3. 埋葬遺骸 …… 8
4. 遺物の出土状況 …… 10
5. 遺　　物 …… 11
(1) 第1群出土遺物 …… 11
(2) 第2群出土遺物 …… 13
(3) 第3群出土遺物 …… 13
(4) 第4群出土遺物 …… 13
(5) その他の遺物 …… 14
6. 結　　語 …… 15

図版・挿図・表

図版 1　大萩37号墓遺構状景 …… 19
図版 2　大萩37号墓出土遺物 …… 20
第 1 図　大萩地下式横穴墓群分布図 …… 6
第 2 図　大萩37号墓実測図 …… 9
第 3 図　第 1 群出土遺物実測図 …… 11
第 4 図　大萩地下式横穴墓出土の鹿角製柄縁装具 …… 12
第 5 図　第 2 ・ 3 群出土遺物実測図 …… 13
第 6 図　第 4 群出土遺物実測図 …… 14
第 7 図　大萩37号墓竪坑出土遺物実測図 …… 14
表　1　大萩37号墓出土鉄鏃計測値 …… 12

1. 調査の経緯

西諸県郡野尻町大字三ケ野山に属する字大萩から岩瀬口にかけて開ける広大な畑地は、地下式横穴墓の群集地として注目され「大萩遺跡」として周知されてきた所である。昭和48年、瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴って22基の地下式横穴墓が緊急調査されるにおよび遺跡の重要性は一段と認識されてきた。その後、49年、50年度と引続き整備事業に伴う緊急調査が実施され、弥生終末期の土壙群や集落跡の発見、更には、隣接する柿川内における縄文前期遺跡の発掘調査等も行なわれ、「大萩遺跡」が、多岐にわたる遺跡の包蔵地であることを明らかにしてきている。3ケ年間の基盤整備事業で、大方の遺構が削平消滅しながらも、なお土中深く埋没する遺構があり、その後も偶然に発見されている。今回報告する遺構は、大萩遺跡の中で最も地下式横穴墓の群集していたB地区の一角で、昭和56年1月27日に発見された遺構である。

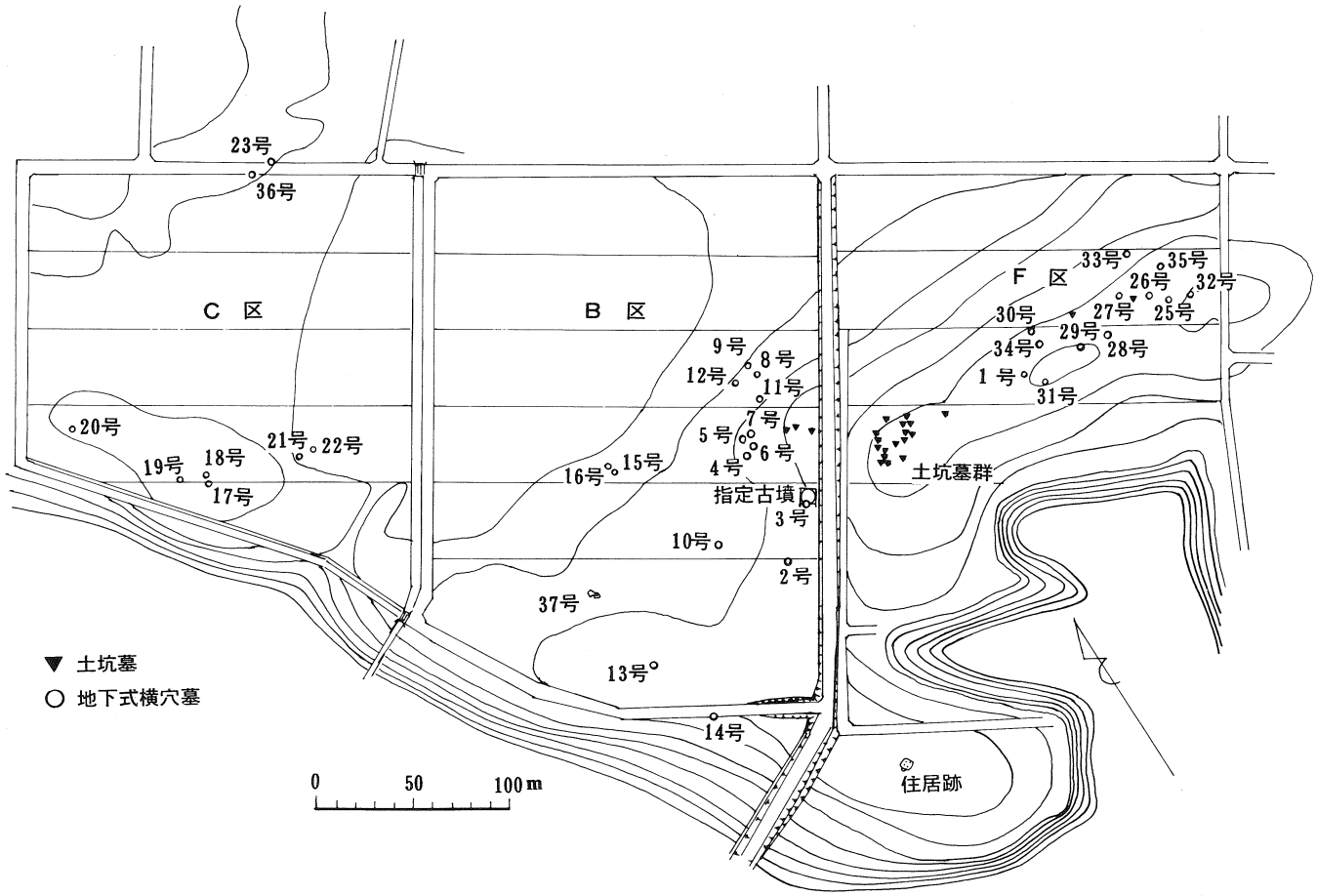
大萩地区では、基盤整備後、蔬菜の栽培が盛んで、今回は、ごぼう植付準備のためトレンチャーによる深耕中に、地下式横穴の玄室右壁寄りの天井の一部を掘削したため一気に表土が落下し陥没口ができたことが、遺構発見の切っ掛けとなったものである。

耕作者からの通報を受けた野尻町教育委員会では、直に遺構の状況確認を行なった後、県文化課に連絡し、緊急調査の手続きをとった。調査は、県文化課及び野尻町教育委員会の依頼を受けて、昭和56年2月9、10の両日に、茂山護が担当実施した。

遺構が発見されたのは、大字三ケ野山字大萩3302～2番地（所有者西原繁）の畑地である。大萩遺跡の中央を占めるB地区に属し、県指定大萩古墳（円墳、墳丘下に地下式横穴3号墓所在）の西方123mに位置している。B地区の分布図によれば、48年に調査された13号、14号墓とを結ぶ南北の線上にあって、ほぼ等間隔で並ぶ北端に位置していることになる。この3基を結ぶ線が、現在のところB区の南限になっている。また本遺構と13号墓は、10号墓を頂点とする二等辺三角形の底辺となる位置にあり、さらに、10号、15号墓とも等距離の二等辺三角形の配置となるなど、B区における遺構分布の上でも注目される配置をみせている。

本遺構は、B区では16番目の発見であり、大萩地下式横穴墓群全体では37基目の遺構として確認されたわけである。従って、本遺構は大萩地下式横穴37号墓（略称、大萩37号墓）と呼称して報告することにしたい。

調査に際しては、作付の遅延をいとわず、全面的に調査にご協力いただいた地主の西原繁氏をはじめ、現場の保全や諸連絡に自ら労をとられ、調査の機会を与えていただいた野尻町教育長真方良穂氏及び町教委職員の方々には多大の助力を得た。ここに感謝の意を表したい。



第1図　大萩地下式横穴墓群分布図

2. 遺　　構　（第２図）

大萩37号墓は、南から北へ向って竪坑、羨道、玄室を掘削した左片袖式の地下式横穴墓であった。竪坑と玄室を結ぶ主軸方向をＮ―27°―Ｗに置き、玄室はこれと直交するＷ―27°―Ｓを長軸方向として構築されていた。

この地域は、特殊農地補全事業に伴う基盤整備を受けたため、耕土下第四層のオレンジ層上面までは地層の撹乱が著しく層序の確認は困難であった。従って、竪坑や玄室上部の掘り方、或は盛土状況等の詳細確認はできなかった。削平を受けない地層では、オレンジ層上面に竪坑の輪郭を明瞭に検出できるのであるが、調査着手前に竪坑の埋土がすでに排除されていた事もあって、掘り込みの確認は一層困難であった。オレンジ層に残された竪坑は、基底幅160cm、長さ160cmの変形した半円状の掘り込みから、逆台形状に掘り下げられていた。オレンジ層面からの深さ1.2ｍ坑底は幅１ｍ、長さ1.1ｍの広さであった。

羨道は、竪坑基底壁面のほぼ中央に、坑底を底辺とする幅55cm、高さ75cmの長方形で、やや斜傾して掘削されていた。埋葬後、羨道入口は、19個の礫石を積みあげて閉塞していた。

閉塞の石積は、まず羨道入口を仕切るように扁平な礫石１個を羨道幅いっぱいに横置しこれを基礎石として、この上に羨道方向と平行して長さ30～40cmの扁平な礫石11個を積みあげて閉塞したものであった。さらに閉塞を囲むように石積前面には７個の礫石を立て並べていた。

ところで、当初、閉塞石の基盤が羨道の床面になるものと予想していたが、閉塞石を取り除き羨道を開口したところ、石積の基盤よりさらに28cmも下位に坑底のくることが判明した。これは、閉塞が初葬だけで完了したものではなく、再度の追葬閉塞の行なわれたことの証しとなった。開口後、墓室内部への流入埋土と人骨の遺存状況は、明確に追葬の事実を裏付けることになった。

開口した羨道は、若干湾曲しながら墓室に繋がり、壁面は、天井、側壁共に広がりをもって滑らかに掘削されていた。右側壁は、そのまま延長して玄室側壁を形成する。他方、左側壁は、羨道入口から97cm進んだ位置で左折し、玄室の左側壁へ向って55度の方向に斜行する左片袖となる。玄室入口での羨道幅は75cm、高さ60cmであった。全長97cmの羨道は地下式横穴墓の中では、やや長道傾向を示す。

左片袖式の玄室は平面形梯型を成す。奥行２ｍ、奥壁幅1.7ｍ、内湾気味の左側壁は長さ1.6ｍ、片袖部分の斜行壁面長は1.4ｍを測る。羨道入口から奥壁までの全長は3.05ｍであった。玄室の天井は、羨道から奥壁に向っては中央部分を最高位とするドーム状を呈し、左右

断面では、右側壁を最高位とする片流れ状で、左側壁へ向い約５度の傾斜勾配を示す。中央部分での天井高90cm、奥壁寄りで50cm、左側壁高70cmを測り、低く屈んだ姿勢で、どうにか動きのとれる天井高の墓室構造であった。

玄室壁面には左右への掘削痕があり、片袖斜行壁面から左側壁面には、左から右方向への掘削痕がみられた。右側壁面には、壁面中央部分から奥壁方向への削痕と、逆に羨道側へ向う左から右方向への掘削痕の流れをみることができた。

墓室床面には、全面に約３cmほどの厚さに敷き詰められたシラス層が認められた。羨道から射し込む微光は床のシラスを反射して、玄室内部に静寂な雰囲気を醸し出す役割を果している。

玄室内に埋葬された遺骸は５体分であった。５体の遺骸は、いずれも右側東壁を頭位としており、下肢を西方に伸ばした仰臥伸展葬であったものと考えられる。頭蓋骨の並ぶ右側壁の上面には、一見、風にはためく幣束を思わせるような不規則な塗朱彩飾が施されていた。壁面中央部分1.5ｍの間に描かれたこの彩飾がいかなる意図をもって描かれたものか具象的な図柄でないだけに速断はできない。しかし、頭蓋骨の並ぶ上部壁面だけに、被葬者への深い感情と、悪霊から死者を守る除魔鎮魂への呪的祈りをこめて塗朱彩飾されたであろうことは大いに推量されるところである。

墓室壁面に何等かの塗朱彩飾の施された例は、大萩地下式横穴墓群の中でも１号墓や、２号墓、34号墓にみられる。比較的明瞭に彩色線文でもって装飾表示されたものとしては36号墓がある。37号墓は、大萩地下式横穴墓群の塗朱彩飾墓にまた１例を加えることになった。

3. 埋葬遺骸　（第２図）

玄室内に遺存した５体の人骨は、すべて頭部を右側壁側に置く仰臥伸展葬で、頭位方向はＮ－63°－Ｅにあった。

５体の人骨は、羨道に近い方から奥壁に向って順に１号～５号人骨と呼称することにした。人骨の遺存度は、４号と５号人骨の頭蓋骨の破損が著しかったのをのぞくと、全体に比較的良く輪郭を留めていた方である。ことに５号人骨や２号人骨の下肢骨は、膝蓋骨や掌骨まで遺存していた。また１号人骨の骨盤などもよく外形を留めていた。しかし、人骨自体の保存度は悪くトーフ状形骸化を呈しており骨の取り上げは困難であった。そのなかで、１号、２号、３号の頭蓋骨は、天井陥没の際に部分的な破損を受けたものの比較的遺りが良かった。３体の頭蓋骨はいずれも朱に彩どられていた。人骨の性別年令については若年の２号人骨と、

第２図　西諸県郡野尻町大萩地下式横穴37号墓実測図

頭蓋骨の破損が著しかった５号人骨を除き、１号と４号人骨が女性、３号人骨は男性との長崎大学医学部松下孝幸講師の現地での観察判定であった。

５体の人骨の遺存状況で観察されたことは、１号人骨が閉塞石下に連なる埋土上に遺存していたことと、１号人骨の右上腕骨が２号人骨の上位にあり、かつ２号人骨の半ばが埋土に被われていたことであった。このことは、少なくとも１号人骨と２号人骨との間には、埋葬に時間差のあったことを証すものとなった。また、３号人骨と４号、５号人骨との間にも、頭蓋骨や四肢骨の遺存度にみる限り若干の差が観察される。これは、３号人骨と４号人骨の間に、両者を仕切るように副葬されていた鉄剣の存在とあいまって、３号人骨と４号、５号人骨の間にも埋葬に時間差の存在した可能性が考えられた。以上のような人骨の状況から推測できることは、37号墓では、４号、５号を初葬として、３号人骨と２号人骨が追葬され、その後に１号人骨が追葬された可能性が大きいということである。閉塞石と埋土の関係からみても、２号人骨と１号人骨の埋葬時期の差は明瞭である。それがどれほどの時期差となるかは速断できないが、副葬品にみる限りでは比較的近接した時期の追葬と考えられた。

4. 遺物の出土状況　（第２図）

37号墓の副葬品は、剣、鉄鏃、刀子、U字形鋤先の４種類13点であった。これらの副葬品は、出土位置によって４群に分けられる。

先ず１群は、３号人骨と４号人骨の間に出土した剣１振、U字形鋤先１個と鉄鏃２本の副葬品である。剣は４号人骨と平行して、柄を頭蓋骨側に、鋒先を下肢方向にして副葬されていた。剣身の中ほどと鋒先に近い部分の２ケ所で折れていたが、シラス敷の床面に密着しており、副葬時の位置にあったものと判断される。鋤先は、剣の柄尻と側壁の間に、刃先を羨道側に向けて埋納されていた。この鋤先と切先を重ねるように２本の鉄鏃が側壁に平行して出土している。この１群の遺物はいずれもシラスの床面に密着した状態にあり副葬時の原位置に近いものと考えられ、４号人骨に副葬された可能性が高い。

２群は、２号人骨の頭蓋骨の下に、側壁に密着平行して出土した鉄鏃２本と刀子１振である。共に鋒を奥壁に向けて錆付き一塊となっていた。出土位置から判断して、３号人骨か２号人骨の副葬品とみなされる。

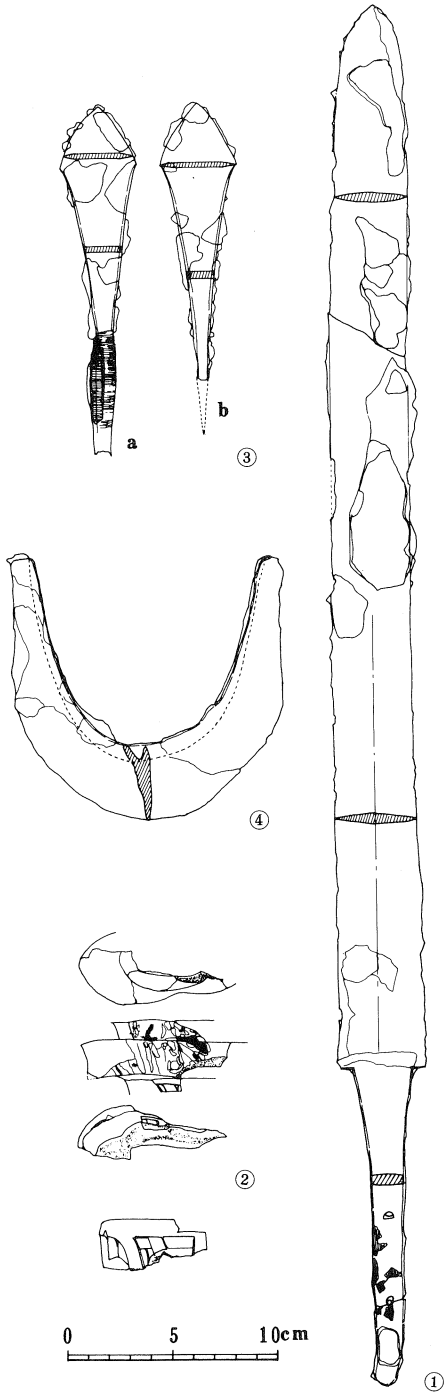
３群の遺物は、１号人骨の骨盤下の埋土下に出土した鉄鏃３本である。鋒を南西方向にして、シラスの床面に密着した状態にあった。１号人骨の骨盤と鉄鏃の間には厚さ３cmからの埋土が介在しており、１号人骨の埋葬に先立ってすでに墓室内に存在していた可能性が強く

２号人骨ないしは３号人骨の埋葬に伴う副葬品と推定される。

４群とした副葬品は、左片袖の南壁に沿って出土した剣１振と鉄鏃２本である。出土の位置関係からすれば１号人骨の副葬品と考えられるが、１号人骨の左下肢骨の下に、しかも床面に密着した状態にあったことなど、３群の鉄鏃と同時に副葬されていた可能性もあり、かならずしも１号人骨の副葬品とは判定できなかった。全体的に37号墓の遺物は、出土状況からみて、１号人骨の埋葬時にはすでに玄室内に存在していた形痕がうかがわれ、初葬ないしは第一次追葬までの副葬品と考える方が無理がないようである。

5. 遺　　物　（第３・５・６・７図）

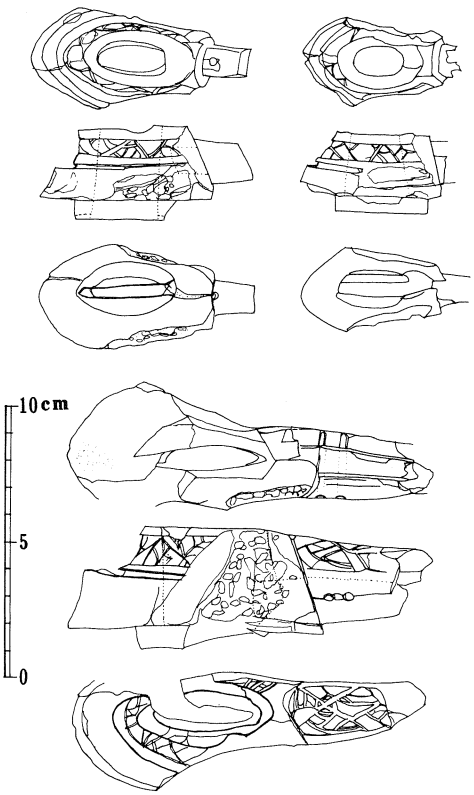
⑴第一群出土遺物―剣・鉄鏃・鋤先（第３図）①剣、全長65.6cm、刃長50.5cm、剣身幅は元幅４cm、先幅3.5cm、断面は重ね薄く元重0.5cmを測る。元から剣身半にかけて鈍い鎬をみるが、半から鋒にかけては錆化の著しいこともあって鎬の有無は判然としない。茎は長さ15.1cm、元幅３cm、茎尻にかけて急激に細まり幅1.5cmほどの細身の茎となる。茎の重ねは0.5cm、栗尻に造る。目釘孔は２孔、４cm間隔で茎尻から４cm、柄元から７cmの位置に各１孔を穿つ。関は両角関で左右各６㎜の切込みをもつ。また柄元には刀装具着装の痕跡をみる。②鹿角製柄縁装具。出土位置から①の剣に着装されていた装具と考えられる。



第３図　第１群出土遺物実測図

半ば以上を欠くが、楕円堆台形の本体部分と、円柱状の突出部とで構成される。本体部分は長さ7cm、高さ3.4cmの片側一部分の残欠である。台形側面のほぼ中央部分に凹みのある鹿角の自然面がくるように巧みに加工されている。このため装具の平面形は、頭部が広く突出部へ細まる杓文字状を呈することになる。柄縁の立上り部分には直弧文図形の一部を示す線刻が見える。本体と柄差組合せになる円柱状の突出部も半ば以上を欠き鏃側にあたる片面のみ残る。残片の上面には帯状表現の組合せ文様である鍵手文が刻まれている。

直弧文様を刻んだ鹿角製柄縁装具は、大萩地下式横穴墓群からは、これまでに3号墓から3個の出土例がある。（第4図）いずれも柄差組合せの形態をとるものである。37号墓の柄縁装具もこれらとほぼ同型だったものと類推される。



第4図　大萩地下式横穴墓出土の鹿角製柄縁装具

③鉄鏃　2本ともほぼ同規格の平根圭頭鏃である。鏃先端と左右稜角を結ぶ頭部形態は正三角形に近い。左右稜角から茎を結ぶ稜線は直線状に伸び、稜角直下の抉り込み等はみられない。鉄の重ねは0.3～0.4cm、重量、計測値に大差なく、同型の鏃とみてよい。

④U字形鋤先。全長12.5cm、最大幅13cmを測る。木床をはめ込む内幅は11cm、深

群	番号	現存長	重量(g)	刃部長	刃部幅	刃部長副指数	
1群	ⓐ	16.5	50	3.5	3.7	105.7	圭頭鏃
	ⓑ	13.2	50	3.5	3.7	105.7	〃
2群	ⓒ	11.8	15	3.2	3.0	93.7	〃
	ⓓ	12.8	24	3.2	3.0	93.7	〃
3群	ⓔ	(25.2)	(32)	(3.4)	(1.5)	(44.1)	片丸造
	ⓕ	18.3	40	3.6	3.4	76.5	圭頭鏃
	ⓖ	20.5	50	3.8	3.7	97.3	〃
4群	ⓗ	21.6	85	5.4	4.5	83.3	〃
	ⓘ	23.2	58	2.7	3.2	118.5	〃

（表1）大萩37号墓出土鉄鏃計測値（単位cm）

さ9cm、木床装着のV字状の袋部の深さは0.7cmである。この計測値は、先に大萩36号墓から出土したU字形鍬先と一致し、形態からも同一工手による同型の鋤先と考えられる。本例も36号墓同様に墓室掘削に使用後そのまま副葬されたものと推定される。

⑵第二群出土遺物―鉄鏃・刀子（第5図①②）

①鉄鏃。2本共やや小形の平根圭頭鏃である。最大幅3.0cm、圭頭高3.2cmと圭頭部分に関しては両者に大きな違いはみられない。稜角から頸部への移行部分の内反りの有無が両者の間の形態差となっている。

②刀子。鉄鏃の矢柄と錆着した状態で出土している。全長18.5cm、柄部には約7cmほどの長さの鹿角製の柄が茎を被っているため関部の形態は明らかでない。刀子の刃長は11cm、刃幅は中央部分で1.1cm、元幅1.5cmを測る。柄断面は長径2cm、短径1.5cmの楕円形を呈する。刃部の反り0.5cmである。

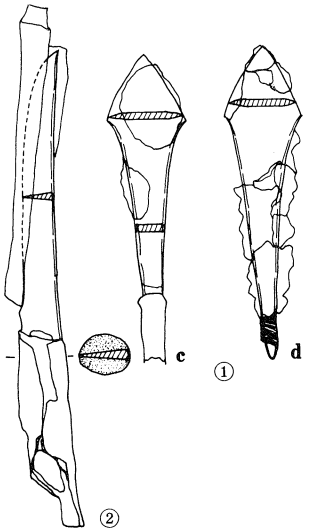
⑶第三群出土遺物―鉄鏃（第5図③）

③鉄鏃。e 細根片丸造柳葉形の鉄鏃である。37号墓出土鏃の中で最も矢柄の遺存していた鉄鏃である。遺存全長25.2cmを測る。関部は両削となり逆刺はない。長頸で篦被の突出はみられない。

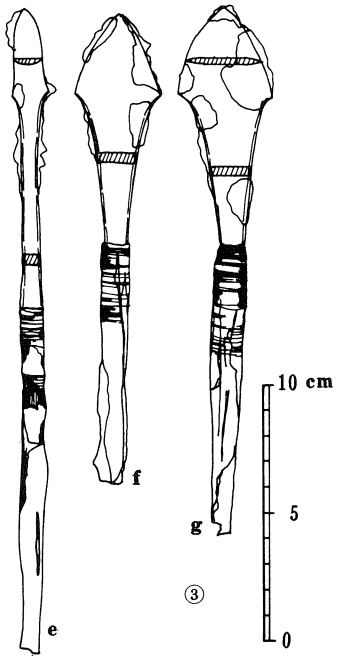
f ・g は平根圭頭鏃。圭頭高3.6cmと3.8cm、最大幅3.4cmと3.7cm、口巻までの長さ9.0～9.5cmと両者の計測差は僅少であるが、関部の内反りがgの方が深く3.5㎜を測る。

⑷第四群出土遺物―剣・鉄鏃（第6図①②）

①剣は、全長37.6cmの短剣である。剣身の長さ28cm、茎長9.6cm。錆化著しく関の形態や目釘孔の位置については確認できていない。剣身部分には桜皮巻上にされた鞘木の残片が銹着している。鞘木残片の断面形か



第2群出土品



第3群出土品

第5図　第2・3群出土遺物実測図

らは、幅 5.4 cm、厚 2.6 cmほどの紡錘形の木鞘が推定される。剣身の重ねは薄く断面厚は 0.5 cmである。鏑なく紡錘形を呈する。

②鉄鏃。大形の平根圭頭鏃と、やや細身の圭頭鏃の 2 本である。大形の鏃は圭頭部の長 4.8 cm、最大幅 4.5 cm、稜角からの内反りも深い。口巻までの長 9.5 cm、鋒からは14cmを測る。37号墓最大の鉄鏃である。細身の圭頭鏃の方は、圭頭部長 2.5 cmと短かく、低平な山形をなす。側縁は、稜角から直線状に茎に結ぶ。低頭の剣菱形の全体形を呈する。鋒から口巻までは 11.3 cmの長さである。

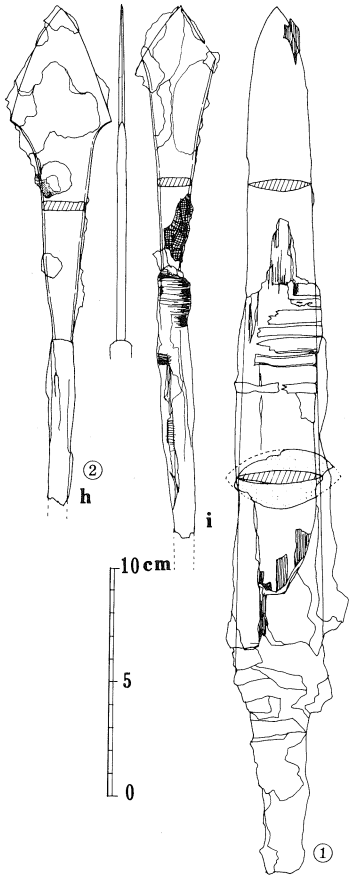
⑸その他の遺物（第 7 図）

37号墓からは副葬品以外に、竪坑埋土中から出土した須恵器と土師器の破片がある。竪坑が調査時にすでに排土されていたこともあって出土位置について明確さを欠くが、いずれも閉塞石の周辺から採集された遺物である。

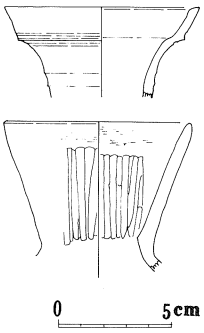
須恵器片。推定口径 8.6 cmの瑕の口縁残片と推定される。器面はナデ調整され、開口する口縁部と頸部の境には、低いながら明瞭な段をみる。口縁は内湾気味に上方へ開口するが短く、口唇は内傾し、ゆるやかな段状を呈する。色調は黒灰色を呈し、部分的に黄灰色の自然釉の付着をみる。焼成度は高く、堅く焼きしまっている。胎土はきめ細かい。

土師器片。坩形土器の口縁部片である。推定口径 8.4 cm、口辺はナデ調整され、器壁の内外に縦方向の篦磨をみる。胎土は少量の砂粒を混入しているが比較的細緻である。焼成も良好で、色調は赤橙色を呈する。須恵器片と37号墓の葬送儀礼に用いられた土器の破砕片と考えられる。

大萩地下式横穴墓群では、これまでにも 7 号墓の竪坑埋土中より土師器坩の出土例がある。いずれも半欠や断片であり埋葬に伴う儀礼後に破砕投棄されたものと推測される。37号墓の場合も初葬、追葬のいずれかの葬送儀礼に伴った破砕遺物と考えられる。



第 6 図　第 4 群出土遺物実測図



第 7 図　大萩37号墓竪坑出土遺物実測図

結　　語

今回の調査遺構を加え大萩地下式横穴墓群には、総数37基の地下式横穴墓の存在が明らかになった。調査された遺構数や規模からいっても、六野原や小木原地下式横穴墓群と並ぶ県内屈指の地下式横穴墓の群集地として位置づけられる重要遺跡である。基盤整備を受けてたものの今回例にみられるよう今後も発見の可能性が残されているだけに、さらに基数の増加が見込まれる。

ところで、これまで発見された37基の地下式横穴墓は、調査時の地区割であるＢ区、Ｃ区、Ｆ区の３つの地区にそれぞれ一つのまとまりをもって分布しており、それらは大萩地下式横穴墓群の１支群として位置づけることができる。さらに各支群は、近接する遺構の形態や基数から幾つかの小群に細分することも可能である。調査された３つの支群のうち調査報告されたのはＦ区だけに、直に全体の形成過程を明らかにできないが、今後、Ｂ区、Ｃ区の調査結果の報告をまって、支群や小群の形成過程や構成集団の組織や構造等、検討さるべき課題である。

大萩37号墓の左片袖式梯形の平面構造は、近接する高原町旭台や、同じ高原町日守から高崎町仮屋尾に分布する日守・仮屋尾地下式横穴墓群に類例の多い形態である。県内でもっとも地下式横穴墓の卓越する西諸県郡地域にあって、特にこの形態が大萩、旭台、日守・仮屋尾の三地域に集中的に分布することは、同時に、この地域に発見例の多い装飾地下式横穴墓の分布とも関連して注目される現象である。

羨道を玄室の片端につける片袖式の墓室は、玄室の平面形を方形または梯形とし、天井を寄棟に造り、三方乃至四方の庇部分に棚状施設を設けた構造を基本型とするものである。旭台遺跡の８号、９号、11号～13号墓、それに装飾のあった６号、７号墓が典型的な例である。仮屋尾の３号墓も基本型を保つ遺構に数えられる。大萩遺跡では、未報告であるが８号、10号、11号、15号墓が類例として挙げられる。これに対し、大萩37号墓の場合、左片袖式ながら棚状施設がなく、天井はドーム状平屋根に変化していること。さらに羨道に長道化の傾向等、基本型からの退行現象が観察されるなど、左片袖式方形（梯形）寄棟型の中では若干の時間差をもつ後出の遺構と考えたい。

片袖式方形（梯形）寄棟型の地下式横穴墓について、石川垣太郎は「妻入型の玄室から平入型の玄室へ変化する過程を示すものが羨道の一方側にのみ張り出した玄室を有するものであろう」と、妻入型から平入型への移行期に平入型に先立って派生した形態として位置づけている。しかし、妻入型長方形切妻型の墓室構造が導入されていない西諸県郡では、妻入型

→平入型→楕円型への編年を基準とするには、いま少し検討の余地があるだけに、片袖式方形（梯型）寄棟型の位置づけについては、なお一考を要するとおもわれる。しかも片袖式方形（梯型）寄棟型の遺構が、墓群の中で主要な位置を占めている大萩や、旭台、日守・仮屋尾遺跡では、この遺構を中心として墓群の構成をうかがうことができるだけに、各地の墓群形成過程とも関連し詳細な検討が求められよう。

ここで、あえて臆測することを許されるならば、地下式横穴墓の成立期には、本来、宮崎平野を中心に分布する妻入長方形切妻型の大型墓室と、西諸県地方の片袖式方形（梯形）寄棟型の整然とした規格をもつ二つの形態が当初から存在していたのではないか、ということである。横穴式石室が西九州に導入拡充される際に、羨道の短い片袖の方形プランをもつ肥後型横穴式石室として独自の発展をした現象とも重ねて考えれば、西諸県地域の片袖式方形（梯形）寄棟型の墓室構造は、多分に肥後型横穴式石室との接触によって派生した可能性の強いことが考慮されるからである。しかも、これら方形（梯形）寄棟型の墓室を中心に装飾墓が展開している現象といい、肥後型横穴式石室との関連を無視することはできないであろう。しかしながら、宮崎平野における妻入長方形妻型と、諸県地域の片袖式方形（梯形）寄棟型の遺構との間にみられる墓室規模と副葬品の格差は歴然であり、両者の形成に係わった被葬者集団の経済力の差はおおいがたい。社会的、政治的な組織の解明が両者の検討課題として残される。

大萩37号墓には、北東を頭位とする五体の遺骸があり、その遺存状況から二度の追葬の証もみられた。埋葬人骨の頭位方向については、かならずしも一定したものではなく、それぞれの地域や所属集団の慣習に従う傾向の強いことは、これまでの報告例からもうかがえる。37号墓を含む大萩B区では、人骨の遺存していた9例中8例までが、N—40°—EからS—60°—Eの範囲にあり、これに包括される東位方向にB群の慣習があったものと判断したい。また、一つの墓室に5体も埋葬した例は少なく、大萩では他に3号墓があるだけで、大半は1乃至2体の少数埋葬で占められている。こうした傾向は旭台でも同様であり、少数埋葬墓より多数埋葬墓の方に、墓群の主要な地位を占める傾向がみられる。これは、構成集団の分化とも係って注目される点である。

最後に副葬品からみた築造年代について検討してみたい。大萩37号墓の築造年代推定の手懸かりとなるものは、副葬された鉄製品と、竪坑採集の土器類である。鉄製品には剣、刀子、鉄鏃、鋤先があるが、いずれも確実な年代の決め手としては迫力に欠ける。

大萩遺跡では、刀剣、鉄鏃、刀子が基準となる副葬品の組み合せであり、これに鎌、鋤先、

鉋等の農工具や、貝輪、耳環、玉類の装身具を加えることにより、副葬品の格差が生じている。大萩37号墓の副葬品は、基準型に鋤先1点が加わった例である。農工具を加えた副葬例は、大萩遺跡では6例を数えるが、うち鋤先を副葬していたのは3号墓と36号墓があり、37号墓は3例目になる。37号墓の鋤先が計測値等からみても36号墓の鋤先と同型といってもよく、同一工手による製品と見なし得ることは、36号墓と37号墓が近接した時期の造墓であることを推測させるものである。

地下式横穴墓における鋤先の副葬例は、宮崎平野では妻入長方形切妻型に、諸県地域では方形（梯形）寄棟型に集中していることは、両者の形成期とも関連し注目されるところである。U字形鋤先の年代観に従えば、鋤先副葬の地下式横穴墓は5世紀後半から6世紀の前半に位置づけられることになる。幸い、大萩37号墓には竪坑から断片的ながらも土器片が採集されている。この土器片が、37号墓の葬送に伴った破砕土器片であるとすれば、須恵器瑕片に示される型式編年の年代観からは6世紀中頃に位置づけられよう。このような鋤先と土器片の示す年代観からすれば、大萩37号墓は、遅くとも6世紀前半を初葬の上限とし、6世紀中頃を追葬の下限とする期間に造営された遺構ではなかったかと推定したい。

参　考　文　献

①日高正晴　1958：「日向地方の地下式墳」考古学雑誌第43巻第4号16―33

②石川恒太郎　1979：『地下式古墳の研究』

③瀬之口伝九郎　1944：「六野原古墳調査報告」史蹟名勝天然記念物調査報告第13輯

④宮崎県教育委員会　1974：「大萩遺跡(1)」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告

⑤茂山　護　1980：「大萩地下式横穴36号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集30―53

⑥石川恒太郎，日高正晴，岩永哲夫　1977：「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第19集

⑦茂山　護，面高哲郎，岩永哲夫　1980：「日守地下式横穴54－1～4号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第22集61―79

⑧岩永哲夫，北郷泰道　1981：「日守地下式古墳群発掘調査（55～1～4号）」宮崎県文化財調査報告書第23集155－169

⑨北郷泰道　1981：「下の平地下式横穴発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第24集31―42

⑩福尾正彦　1980：「日向中央における地下式横穴とその社会」古文化談叢第７集105 ― 141

⑪柳沢一男　1980：「肥後型横穴式石室考」鏡山猛先生古稀記念「古文化論攷」465 ― 497

⑫小田富士雄　1979：「九州の古墳文化」九州考古学研究古墳時代篇31～89

⑬大阪府教育委員会　1979：「陶邑Ⅳ」大阪府文化財調査報告書第31集

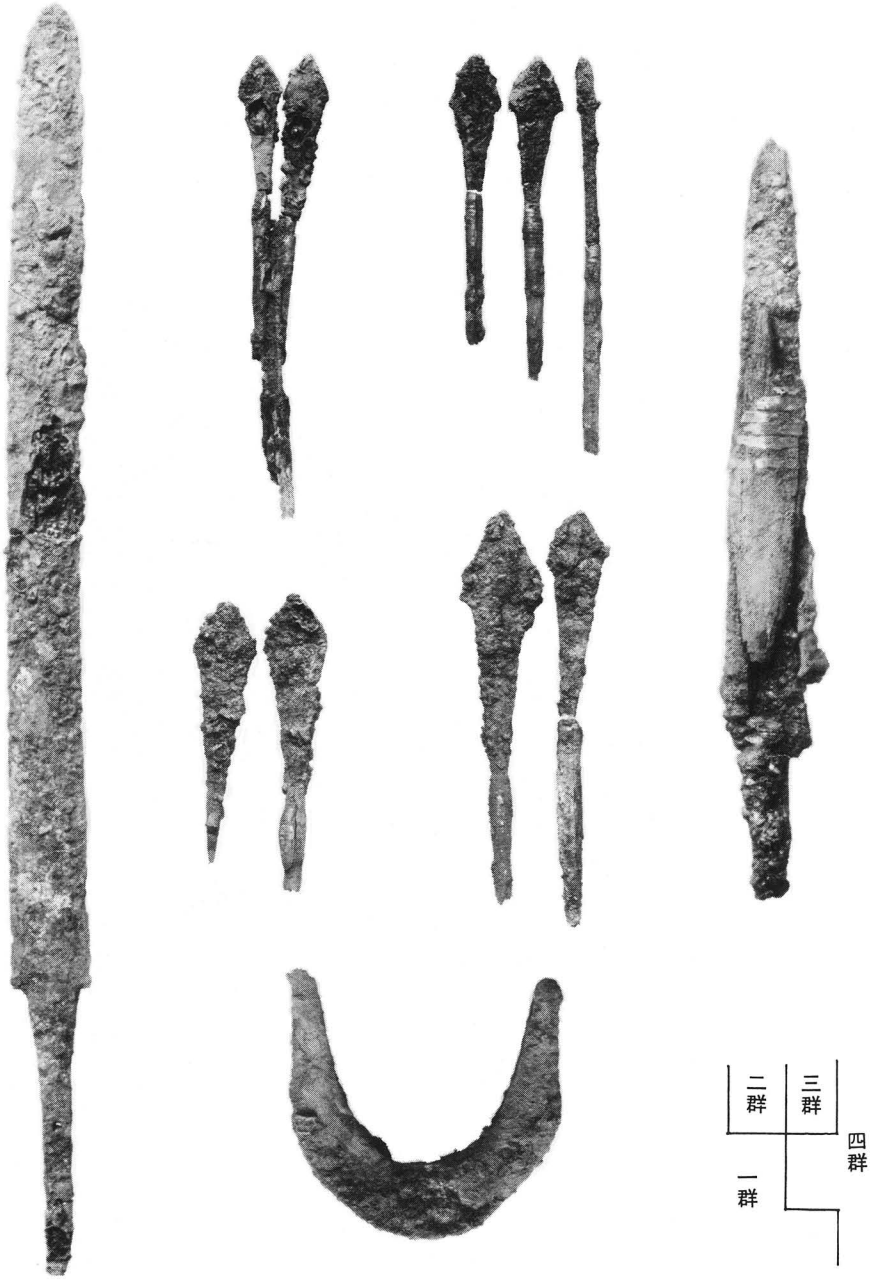
図版1　大萩37号墓遺構状景

◀竪坑と閉塞石積

▼羨道から見た玄室内部

人骨遺存状況

図版2　大萩37号墓出土遺物



中ノ迫A遺跡

NAKA NO SAKO

例　　言

1. 本報告は宮崎県教育委員会が実施した児湯郡川南町中ノ迫Ａ遺跡の緊急発掘調査報告である。
2. 調査は昭和53年２月16日から２月18日まで実施し、文化課主事岩永哲夫、宮崎考古学会員田ノ上　哲（現・えびの市立上江小学校教諭）が担当した。
3. 本書の執事・編集は岩永哲夫が行った。
4. 遺物実測には県埋蔵文化財センター谷口武範、津隈久美子氏の協力を得た。
5. 遺構実測図の方位は磁北を示している。

目　　次

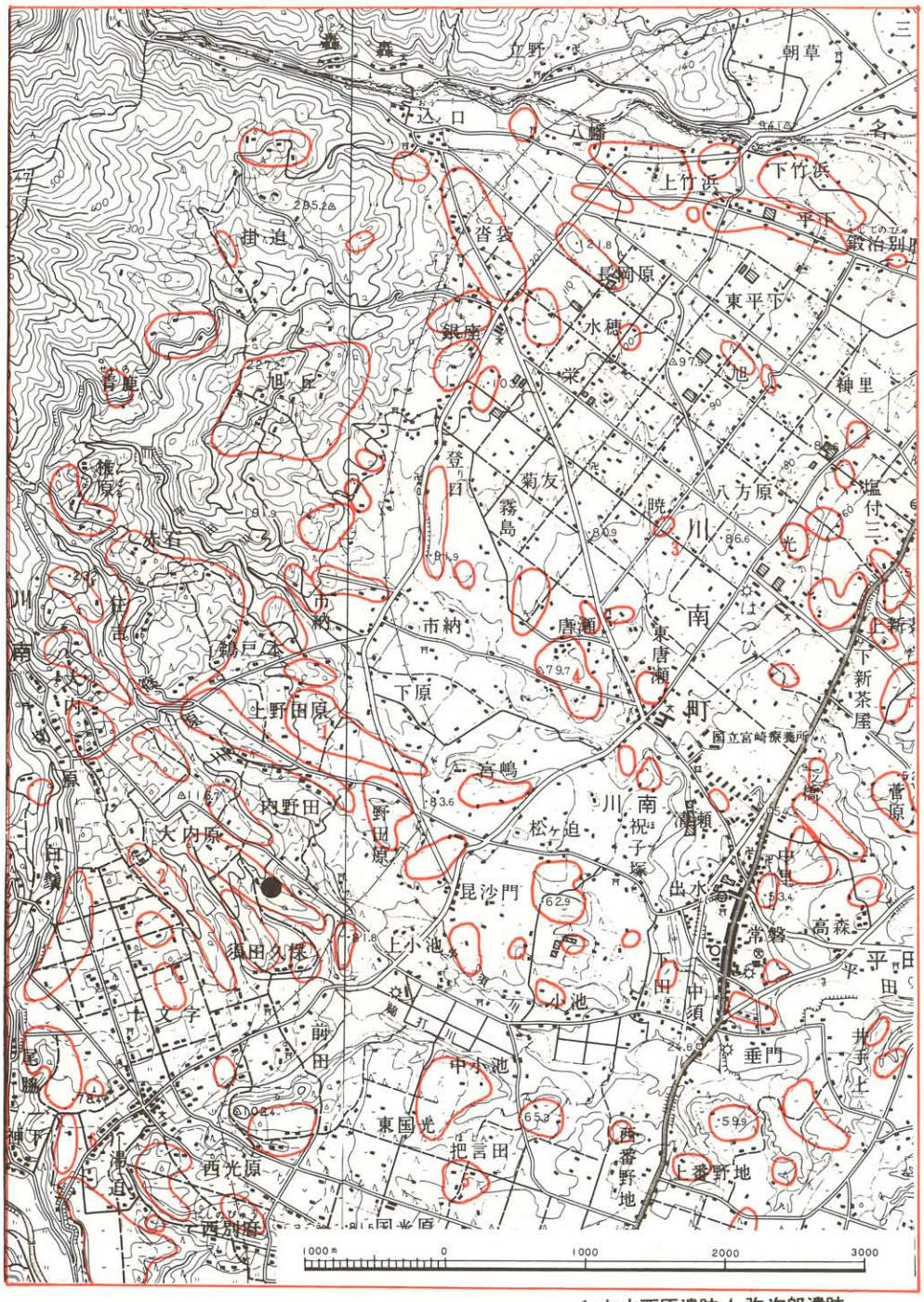
はじめに…… 22
Ⅰ　所　在　地…… 24
Ⅱ　調査の結果…… 24
1.　遺　　構…… 24
2.　遺　　物…… 24
(1)　住居跡出土遺物…… 24
(2)　土壙内出土遺物…… 28
(3)　周辺出土土器…… 29
(4)　住居跡周辺採集遺物…… 31
Ⅲ　結　　語…… 32

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 21
第２図　遺構周辺図…… 22
第３図　遺構実測図（住居跡・土壙）…… 23
第４図　住居跡出土遺物実測図(1)…… 25
第５図　住居跡出土遺物実測図(2)…… 27
第６図　住居跡出土鉄鏃実測図…… 28
第７図　土壙出土土器実測図…… 28
第８図　ピット状遺構出土石器実測図…… 29
第９図　周辺出土土器実測図…… 29
第10図　住居跡周辺採集遺物実測図(1)…… 30
第11図　住居跡周辺採集遺物実測図(2)…… 32

図　版　目　次

図版 1　調査風景……34
図版 2　(1)　住居跡……35
　　(2)　鉄鏃・高杯脚部出土状況……35
図版 3　(1)　石庖丁出土状況……36
　　(2)　住居跡外甕出土状況……36
図版 4　住居跡出土土器……37
図版 5　住居跡・ピット状遺構出土遺物および表採石庖丁……38
図版 6　住居跡周辺出土甕および表採遺物……39



第1図　遺跡位置図（●印）弥生後期集落遺跡

1. 丸山西原遺跡
2. 大　迫遺跡
3. 香田原遺跡
4. 弥次郎遺跡
5. 把言田遺跡
6. 前原B遺跡

はじめに

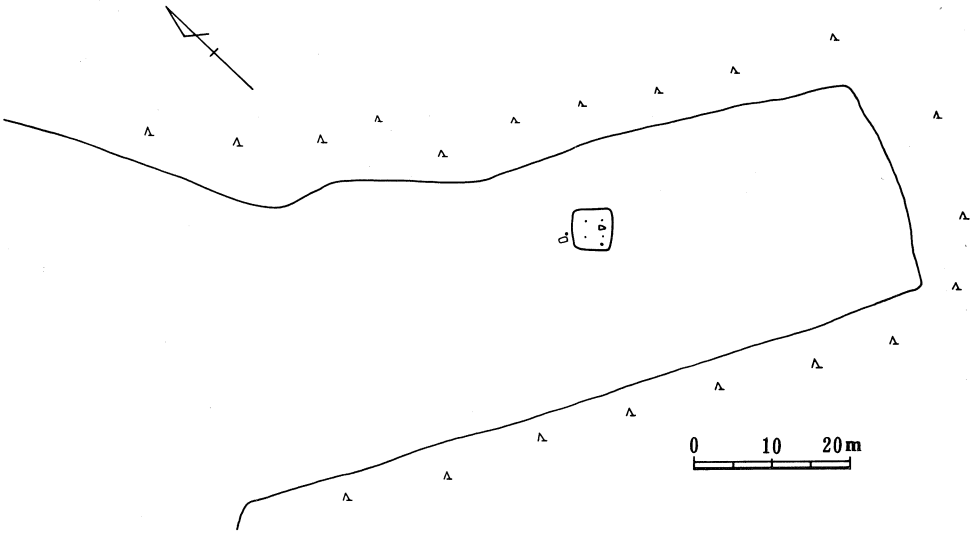
川南町では以前からかなりの場所で住居跡様遺構や土器などの遺物の出土が知られていた。これらの多くは畑の耕作中に発見されたもので、町文化財保護審議会委員遠藤　学氏の精力的な遺跡探索の中で注意されたものであった。今まで小型農耕機械や手作業に頼ることの多かった農業も近年大型機械導入等によって深耕されるようになり、太古の眠りを続けていた遺跡群も現代に再登場することとなった。

国民共有の財産としての遺跡の破壊される危険性が高まりつつある情勢から川南町教育委員会では、昭和57年度国・県の補助を受けて町内全域に亘る遺跡詳細分布調査を行い、既登録の遺跡数をはるかに上まわる大遺跡群を確認することができた。(注)

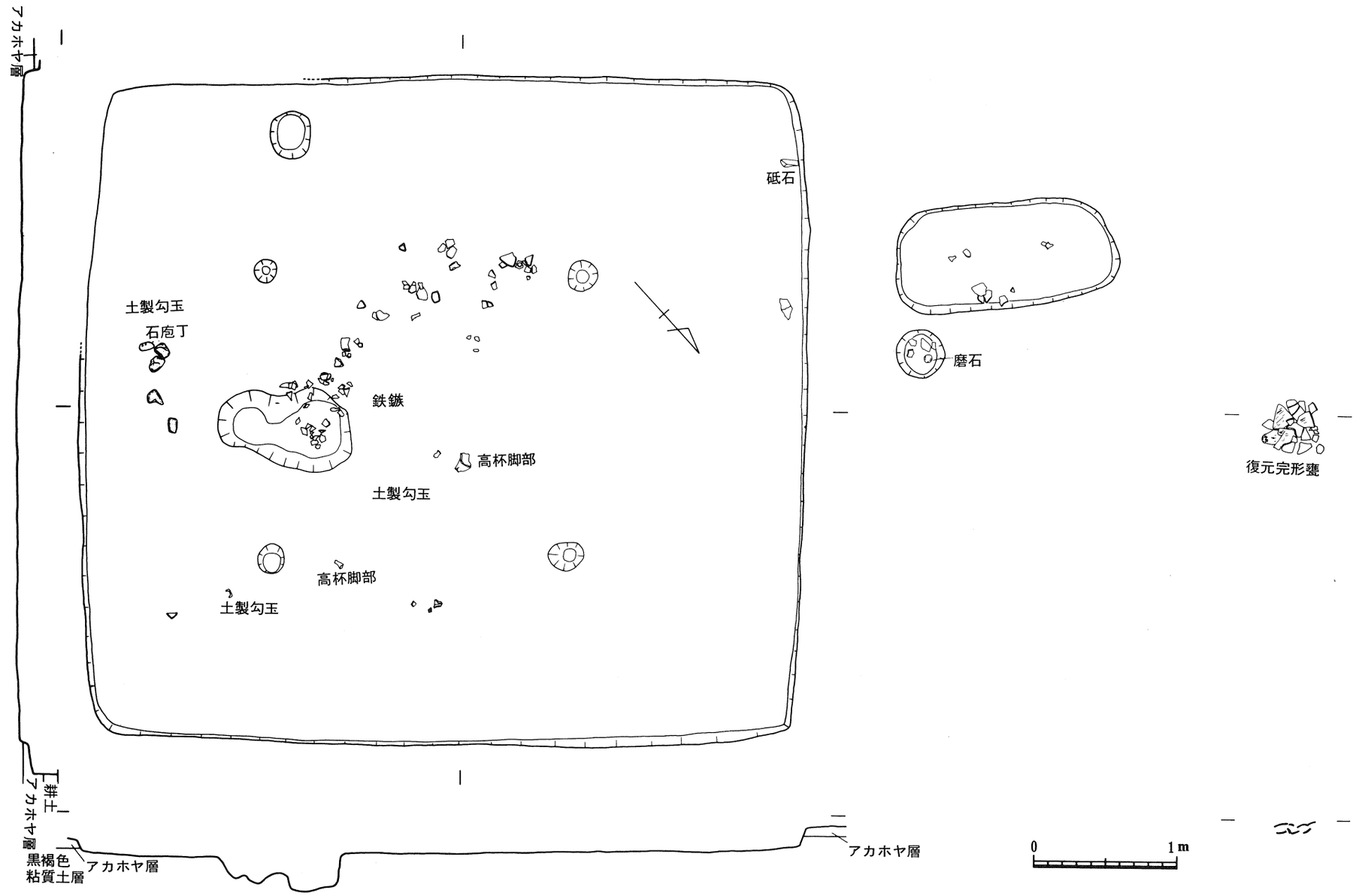
ここに報告する中ノ迫Ａ遺跡は畑耕作中に多数の土器が出土したことにより弥生時代の住居跡の存在が確認され、宮崎県教育委員会が昭和53年２月に発掘調査を行ったものである。この遺跡は前記遺跡詳細分布調査の結果、広範囲な遺跡として登録されている。

発掘調査に際し、土地所有者小田喜一氏をはじめ川南町教育委員会、川南町文化財保護委員新藤繁秋・遠藤　学・永友芳弘・福長　一・黒岩三男の各氏に多大な協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

注. 川南町教育委員会「川南町の埋蔵文化財」遺跡詳細分布調査報告書　1983. 3



第２図　遺構周辺図



第 3 図　遺構実測図（住居跡・土壙）

Ⅰ、所在地（第１図）

児湯郡川南町大字川南 1,170 番地の 293 の 2

中ノ迫Ａ遺跡は尾鈴山麓大内の平坦面がゆるやかに南東に延び、先端が三方に分岐したその中央部の台地上標高75ｍから107ｍに位置する遺跡であるが、報告の住居跡は舌状台地大内原の東端にあり、北，東，南の三方を山林に囲まれた畑の中に所在する。

周辺の台地上には中ノ迫Ｂ遺跡，綿打上Ａ遺跡，丸尾遺跡，大内遺跡，大迫遺跡などの弥生遺跡があり、当時大集落群を形成していたことをうかがい知ることができる。

Ⅱ、調査の結果

1. 遺　構（第２・３図）

作物植付け前の状態の時に発掘を始めたが、耕作土の表面に住居跡の輪郭が判明しており、周囲に土器片が散布していた。耕作土を除去し、遺構精査に入ったが、遺構の上半は既に失われており、壁面の一部と床面が残存している程度で、したがって包含されている遺物も僅少なものであった。

確認した遺構は住居跡１軒、土壙１基、住居外ピット１個であった。しかし、発掘対象にした区域は住居跡中心の極めて限られた範囲であり、同地周辺の山林を含めて大規模な集落を成すものとみられる。

住居跡は４ｍ60㎝×５ｍのほぼ正方形に近い隅丸方形である。壁面は南側の隅周辺を欠失し、床面を確認したのみであって、他の部分においても５～10㎝残っている程度であった。柱穴は住居跡の形状に合わせて中央寄りに４個確認し、床面からの深さはいずれも75～85㎝を計測した。また、中央部から東寄りに長辺90㎝、短辺55㎝の炉跡とみられる楕円形状の窪みがある。

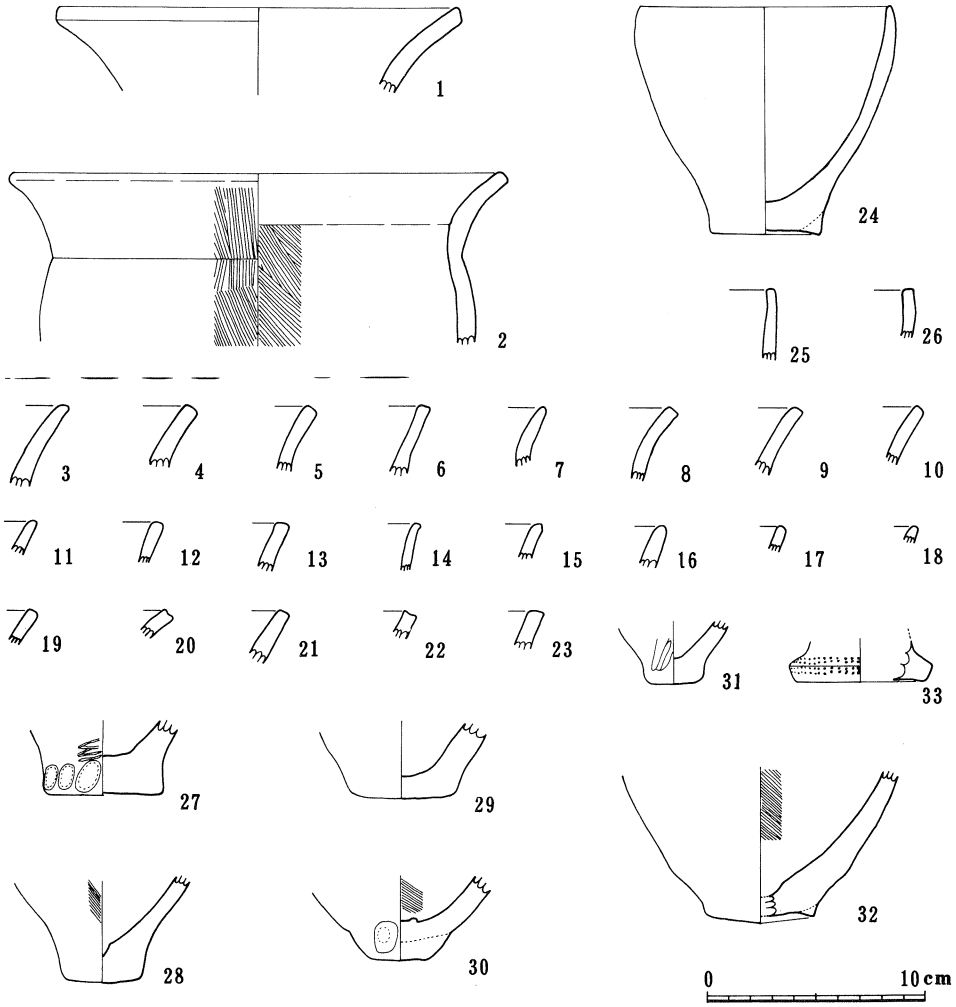
住居跡の北西側には長径155㎝、短径75㎝の楕円形土壙があり、深さは16㎝程度の浅いものであった。更に、土壙に隣接して直径35㎝、深さ15㎝のピットがあった。

2. 遺　物（第４～11図）

遺物は遺構別に記述するが、住居跡周辺採集遺物としたものには住居跡上部の耕土中と耕作の際、畑地脇に片付けられていたものがあり、これらは一括して報告する。

(1) 住居跡出土遺物

住居跡からは甕形・鉢形土器、高杯、土製勾玉、鉄鏃、石庖丁、砥石が出土している。



第４図　住居跡出土遺物実測図(1)

甕形土器（第４図１～23）

いずれも小片で完形に復元できるものはない。

１は胎土に１～２㎜の砂粒を混入し、焼成も良い暗褐色を呈した口縁部片である。推定口

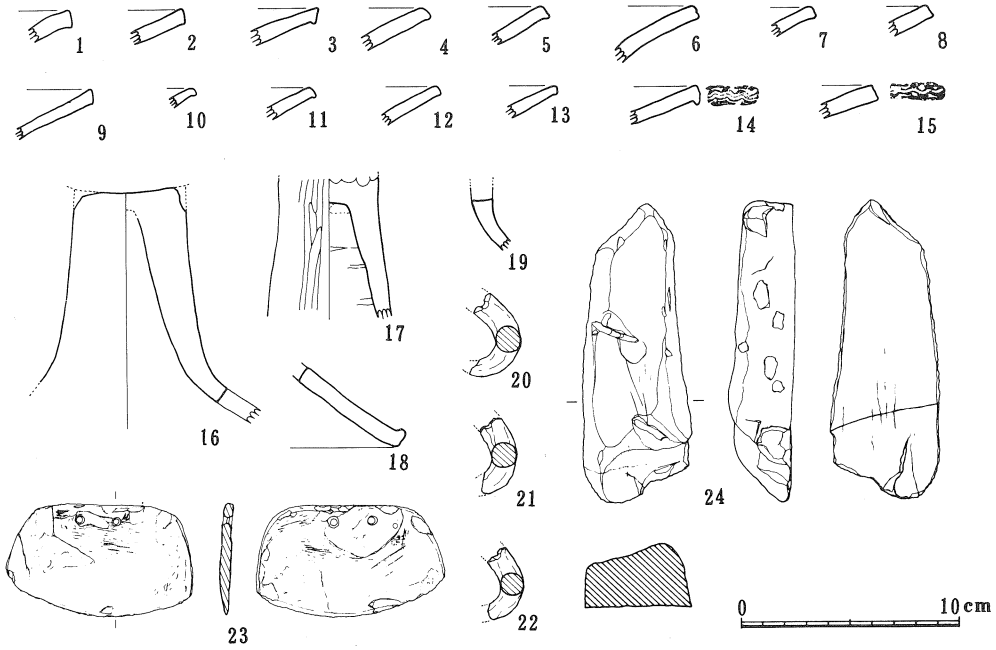
径18.2㎝を測る。器面の調整は表面が上位はヨコナデ、下位は縦にナデがみられる。裏面は粗い不整方向の擦痕が目立つ。2は胎土にやや大きめの砂粒を混入した焼成の良い淡褐色の口縁部片である。頸部屈折して上方に強く外反し、口唇部は丸い。やや胴に張りがみられる。推定口径22.2㎝を測る。器面調整した表面は端部はヨコナデ、屈折部までは縦位に刷毛目がみられ、以下は縦および斜めに刷毛目がみられる。裏面は口縁部上位はヨコナデ、以下頸・胴部に続いて斜めに刷毛目調整が施されている。3～23は口縁部小破片のため器形は不明であるが、形状等からみて一応甕形土器の項に入れておく。次のものは器面調整として刷毛目が認められる（4.5.7.8.9.10.11.12.13.19.20.21.22）。

鉢形土器（第4図24～26）

24は推定口径11.4㎝、器高10.4㎝、底部5.0㎝の小型鉢である。底部からやや開き気味に立ち上がり、内彎しながら口縁端に至る。底部端はつまみ出しによって成形し、上げ底状になっている。器面調整は表裏ともナデ調整である。また、口縁部上位には表裏ともかすかに朱が認められる。焼成は良く、淡褐色を呈しているが、一部に黒色の焼成痕がみられる。25は成形・調整が雑で、暗淡褐色を呈する。24と同様な器形が考えられる。26は暗赤褐色で内彎度が強い。表裏ともナデ調整である。

底部（第4図27～33）

27は推定底径5.4㎝の安定した平底である。わずかに上げ底をなし、外面には指頭による整形痕を残している。焼成は良く、暗褐色を呈している。胎土に細かな石英粒を含んでいる。28は底径3.5㎝を測り、脚台状をなし、安定は良くない。器面の風化がみられるが、斜めの刷毛目痕が認められる。内部中央には直径1㎝ほどの窪みがある。胎土は細かく褐色を呈する。29は推定底径4.6㎝の平底である。胎土にやや大きめの砂粒を混入し、焼成良く、淡褐色を呈している。器面調整はナデ調整を行っているが、粗雑である。30は底を貼り付けた粗い整形の半丸底状で底径2.5㎝を測る。胎土にはやや大きめの砂粒を混入し、焼成は良く、赤味がかった褐色を呈している。器面調整は内外ともに粗く、底は未調整のままとみられ、上部はヘラ整形である。内面には刷毛目痕がみられる。31は底径2.5㎝の小型平底である。胎土には小さめの砂粒を混入し、暗褐色を呈している。表面の調整はヘラミガキである。32は底径5.0㎝の平底であるが、つまみ出しにより端部を形成し、わずかな上げ底になっている。胎土には多くの砂粒を含み、焼成は良い。褐色を呈する。器面調整は表面はナデであるが、内面の上部には刷毛目がみられる。33は底部の項に入れたが器形が定かでない。半截竹管によるとみられる刺突文が上下二段に一巡している。胎土には砂粒を含み、焼成は良くな



第５図　住居跡出土遺物実測図(2)

い。

高杯（第５図１～19）

１～13についてはいずれも小破片のため全体器形は不明であるが、形状および器面調整の状態から一応高坏の項に入れておく。器面調整でヘラ磨き、ヘラナデの認められるものは1，3，4，5，6，13，14，15である。また胎土が細かいものとして10，11，12，器面が滑らかなものとして４，６，11，12，14，15があげられる。14は暗褐色を呈した焼成の良い杯部破片である。端部には８㎜幅のやや広い平坦面をつくり、櫛描波状文を施している。15も７㎜の平坦面に櫛描波状文を施している。焼成の良い褐色土器である。16は高杯の軸部からすそ部にかけてのもので、すそに近い部分に二カ所丸い透し穴がみられる。復元すれば４個の透し穴をもつものと考えられる。風化が著しいが、内面はナデ、外面はヘラ磨き調整と思われる。淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。17も脚部とみられ、焼成の良い褐色を呈した土器である。外面はヘラ磨き調整である。18はすそ部とみられ、透し穴がある。内面は刷毛目、外面はヘラミガキの調整をしており、焼成良く褐色を呈している。19はすそ部にかけての部分とみられ、透し穴が認められる。内面ナデ、外面ヘラ磨きの調整を行い、焼成の良い褐色土器である。

土製勾玉（第５図20～22）

３点出土しているが、いずれも穿孔部で折損している。１～２㎜程度の砂粒を混入し、焼成は良い。黒褐色を呈する。形状は断面円形の紐状を呈し、太い方に直径３～４㎜の円孔を両面から穿っている。

石庖丁（第５図23）

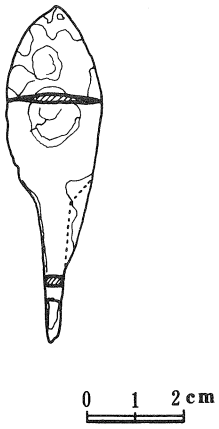
住居跡の東南側から１点出土している。形状は台地に近く、縦５㎝、最大幅8.5㎝、最大厚み５㎜を測る。刃部は孤状にふくらみ、背部は直線的に、両側面はやや孤状に研磨している。上部に直径４㎜の円孔を穿っている。全体的にわずかな反りがみられる。砂岩製。

砥石（第５図24）

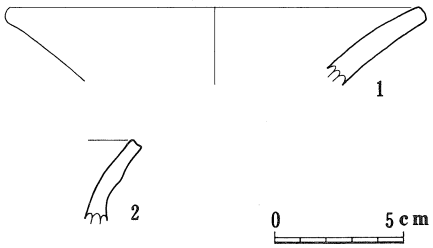
長さ13.5㎝、幅3.5～4.8㎝、厚さ2.3～2.7㎝ほどの大きさである。砥ぎ面は２面と考えられ、一面は平滑であり、他の一面にはわずかな凹みがみられる。

鉄鏃（第６図）

炉とみられる箇所からの出土で、鏃身のみである。現長は6.9㎝、最大身幅2.0㎝、厚さ２㎜の柳葉形鉄鏃である。



第６図　住居跡出土鉄鏃実測図



第７図　土壙出土土器実測図

⑵　土壙内出土遺物

壷形土器（第７図１）

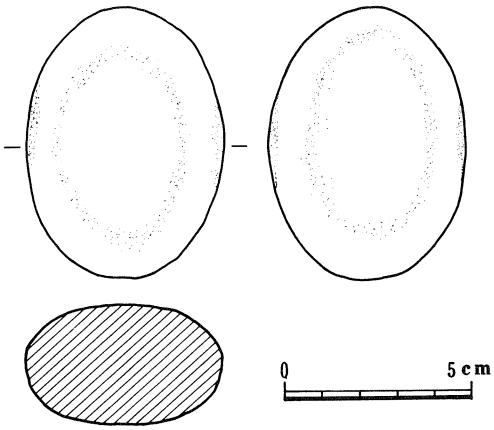
小片の口縁部で、推定口径16㎝を測る。胎土に１～２㎜の砂粒を含み、焼成良く淡褐色を呈する。口縁端部は平坦で表裏ともナデ調整である。甕形土器の可能性もある。

甕形土器（第７図２）

頸部屈折の口縁部である。胎土に２㎜程度のやや大きめの砂粒を含む。口縁端は平坦で、表裏ともナデ調整である。焼成良好、淡褐色を呈する。

ピット状遺構出土石器（第８図）

石器としては磨石が１点出土している。長径7.2㎝、短径5.3㎝、厚さ3.1㎝を測る。全面的によく研磨されている。

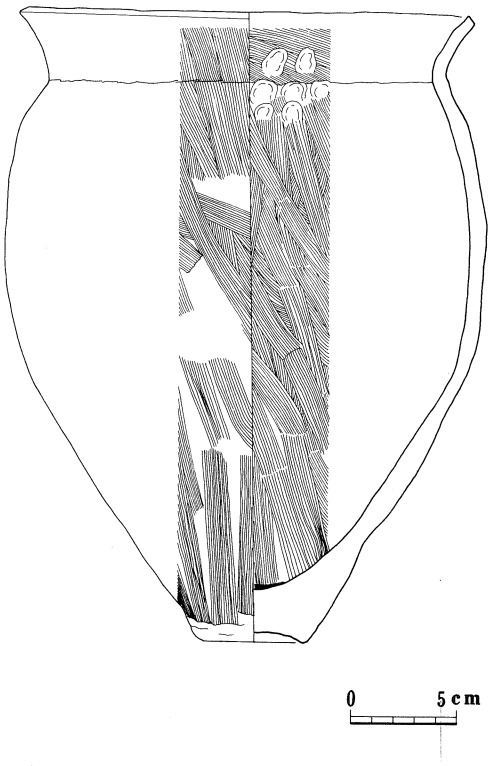


第８図　ピット状遺構出土石器実測図

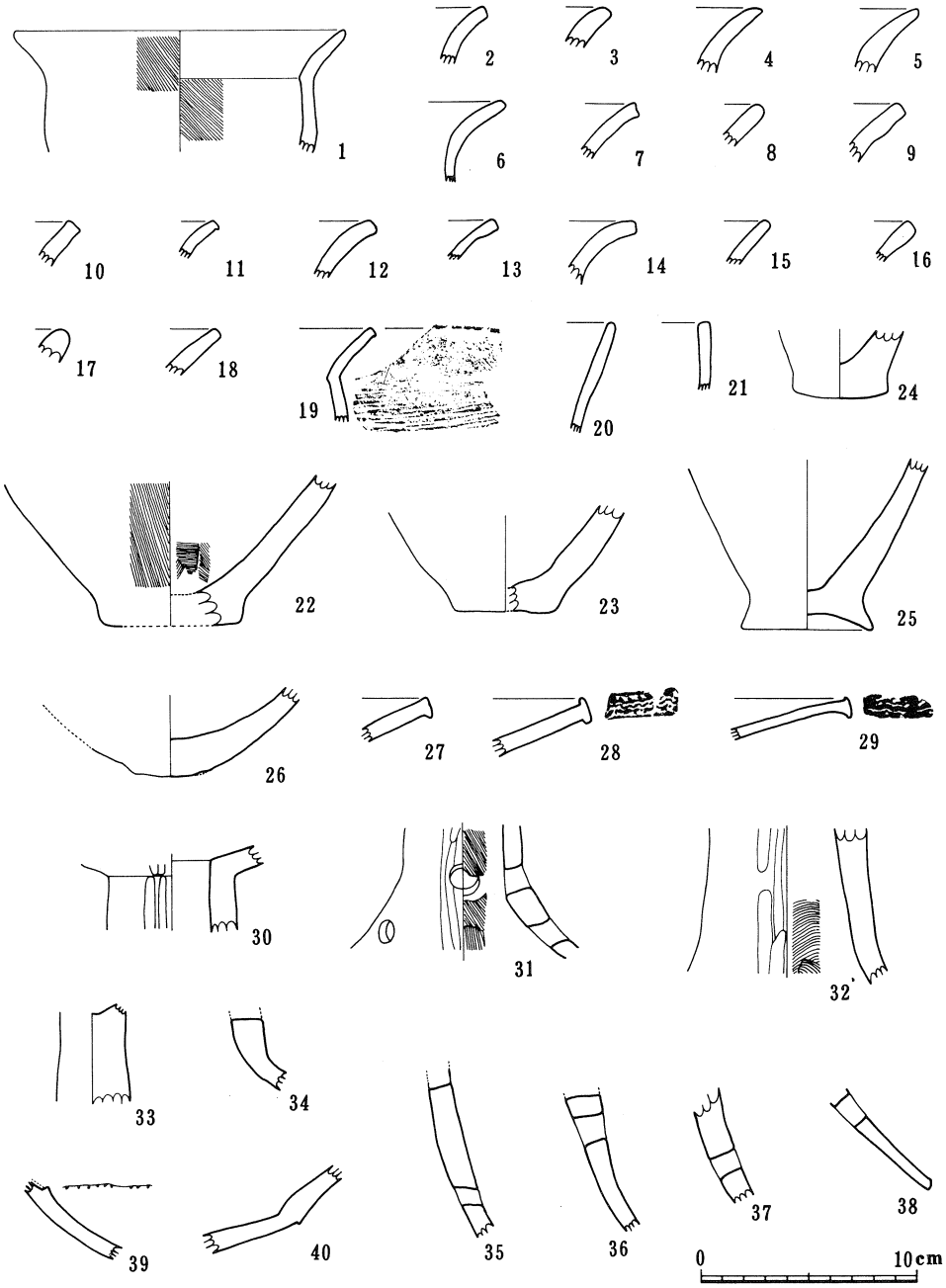
(3)　周辺出土土器

甕形土器（第９図）

住居跡の西方約3.4ｍの地点に甕形土器が１個体分押し潰された状態で出土した。今回調査分では唯一の完形土器である。口径20.6㎝、底径4.7㎝、器高29.4㎝を測る。胴部の膨らみは少なく、頸部がしまり、やや外反した口縁をなす。底部は厚く、中窪みの上げ底を呈する。表面には底部を除き全面にススが付着している。胴部中央付近は特に厚い。また、部分的にではあるが、口縁部内側にまで付着している。器面調整は口唇部は平坦に面取りののちヨコナデ調整、口縁部上端は刷毛目調整したあとで横方向のナデ調整をしている。また、内外面とも縦、斜め方向の刷毛目が全面にみられる。胎土には１～２㎜程度の砂粒を含み、焼成良く、やや灰色がかった淡褐色を呈している。



第９図　周辺出土土器実測図



第10図　住居跡周辺採集遺物実測図(1)

⑷　住居跡周辺採集遺物

甕形土器（第10図１～19）

前述した住居跡出土の甕形の口縁部同様に小破片が多く全体器形は不明であるが、ここでも一応甕形土器の項に入れておく。

１は推定口径15.2㎝を測り、胎土に１～２㎜の砂粒を含む暗褐色の口縁部片である。外面は斜めの刷毛目調整を施し、頸部以下は刷毛目の後ナデ消しており、内面は口縁部はナデ、屈折部から下は斜めの刷毛目調整である。外面にはススが付着している。焼成は普通である。４は１㎜程度の砂粒を含み、暗褐色を呈している。器面調整は内外とも雑で未調整に近い。外面にはススの付着がみられる。焼成良好。19は胎土に１～２㎜の砂粒を多く含み、厚さ５㎜程度の薄手の口縁部である。褐色を呈し、焼成はあまり良くない。口縁部は大きく外反し、端部は平坦で調整のため１㎜程度外にはみ出している。調整は口縁部上半はヨコナデ、その下頸部屈折部までは斜めの刷毛目調整を施し、頸部以下は横方向の叩きを行っている。内面は風化がひどいが、横ナデ調整である。

底部（第10図22～26）

平・丸・上げ底の３形態がある。22は推定底径6.5㎝の平底である。胎土に１～２㎜の砂粒を含む。焼成は良く、褐色を呈している。外面には縦にうすい刷毛目、内面にも縦・横・斜の刷毛目がみられる。23も平底で推定底径4.5㎝を測る。胎土にはやや大きめ（３㎜程度）の砂粒も含む。焼成はあまり良くなく、風化が著しい。赤褐色に近い色調を呈する。内面には指押え痕がみられる。24は底径4.4㎝のやや丸味を帯びた平底である。胎土には23と同様やや大きめの砂粒を含む。焼成良く黒褐色を呈し、外面にはヘラ削り、指押え痕がみられる。25は推定底径６㎝を測り、中央部で６㎜の上げ底状をなす。胎土には１～２㎜の砂粒を含み、焼成の良い暗褐色～黄褐色の色調を呈する。内外ともナデ調整である。26は丸底に粘土の貼り付けを行い、底部を形成している。胎土に多くの砂粒を含み、焼成の良い淡褐色を呈した土器で、内外ともナデ調整を施している。

器台（第10図30，32）

器台の胴部片と思われる。焼成は良く、器面調整は外面は縦にヘラミガキ、内面はナデ（30）、上部にナデ、下部に刷毛目を行っている。32は暗褐色を呈し、焼成ムラがみられる。

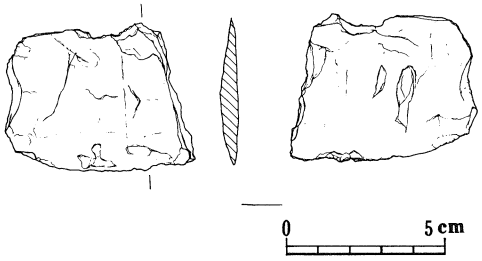
高杯（第10図27～29，31，33～40）

27～29、40は高杯杯部とみられる。口縁端部に１㎝程度の平坦面をつくり、28，29には半截竹管様の施文具で、交互に孤を描く波状文的文様に押引き列点文を併用して施文している。

焼成はともに良好、淡褐色を呈する。31、33～39は高杯脚部で、器形的にはいくつかに分けられる。36，37を除いて器面調整は外面にはヘラミガキが施され、内面は刷毛目（31，36，38，39）とナデ（34，35，37）が行われている。

石庖丁（第11図）

両端に抉り込みのあるタイプで、中央付近で折損している。短径4.6㎝、最大厚0.5㎝を測る。粘板岩質である。



第11図　住居跡周辺採集遺物実測図(2)

Ⅲ、結　　語

今回の発掘調査は弥生時代終末期の住居跡一軒の調査であったが、耕作の進行によってほとんど床面のみを残す状態で、残された遺物もわずかなものであった。しかし、遺物の中には県内初見の土製勾玉や方形石庖丁が含まれ、好資料を得た。出土状況も床面直上といってよい。住居跡出土の土器はほとんど小片であったが、その中には東平下円形周溝墓(注1)の周溝から出土した庄内式期併行とみられる高杯の口縁端部に類似のものがあり、また周辺採集資料ではあるが、庄内系甕片もあり、弥生終末から古墳初頭位の時期が考えられよう。遺構は四本柱のほぼ方形プランをなし、宮崎平野から諸県地方にかけて分布する「花弁状」住居跡との関連で注目しておきたい。(注1)

川南町内における弥生遺跡は、前期は未確認であるが、中期になると下ノ原・赤石・前原B・萠牟田などの山麓縁辺部に立地する遺跡でみられる。後期になると急増し、大規模な集落群が営まれるようになる。たとえば、本遺跡のすぐ南の舌状台地に所在する大迫遺跡などは未発掘ではあるが、40余軒の住居跡や数基の周溝墓が確認されている。このような後期から終末期に至る繁栄の中に日向中央部に集中的にみられる大古墳群を生み出し得た強固な基盤を見い出すことができよう。

注1.　昭和55年2月に県教委主体で円形周溝墓1基が性格解明を目的として調査された。
県文化財調査報告書第29集に報告予定。

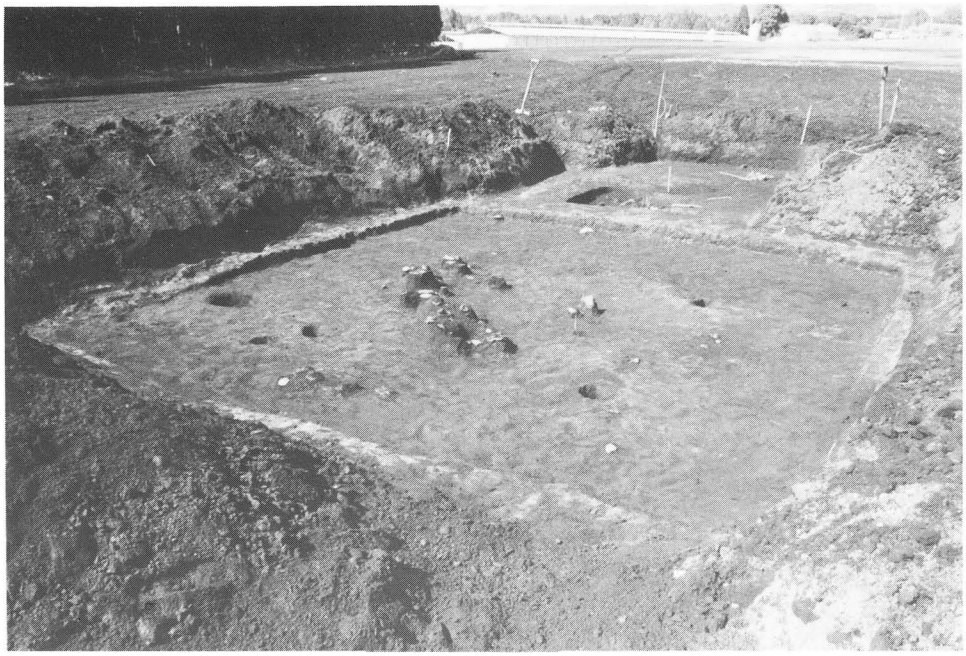
注 2. 「花弁状住居跡」は野尻町大萩遺跡をはじめとして、都城市丸谷第１遺跡、同市祝吉遺跡、宮崎学園都市遺跡群、新富町新田原遺跡にみられる。時期的にほぼ併行するところもあり、文化の伝播の状況・経路を考える上でおもしろい。

図版1

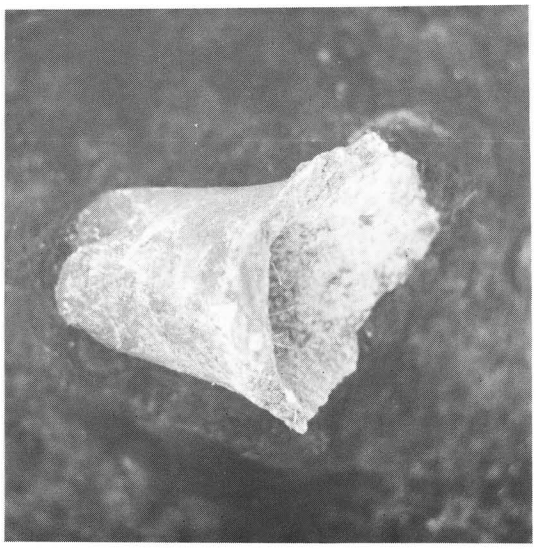
調　査　風　景

調　査　風　景

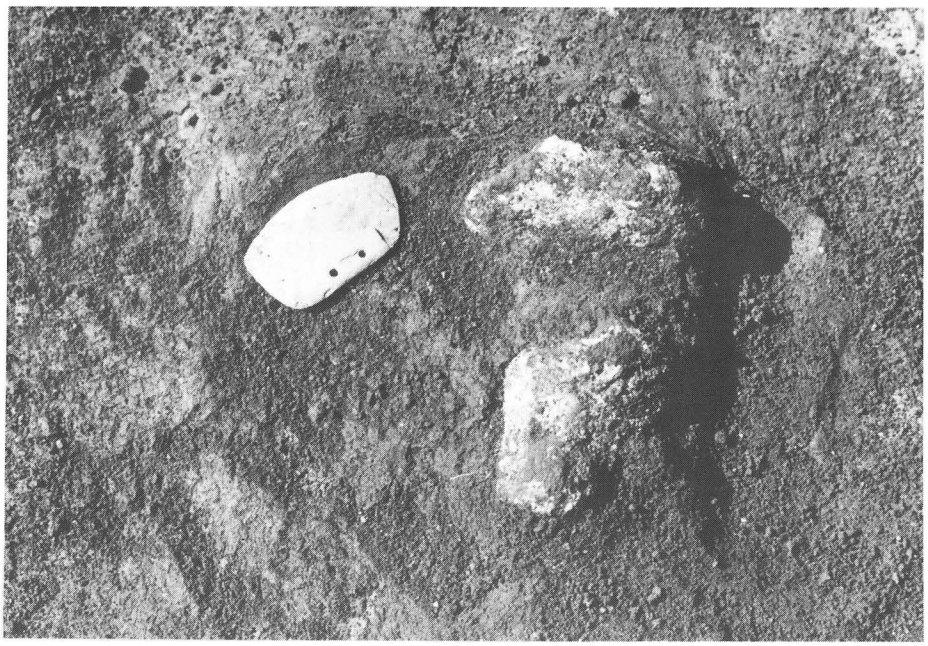
図版2



(1) 住 居 跡



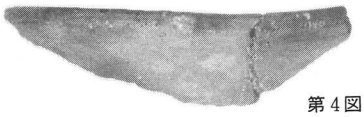
(2) 鉄鏃、高杯脚部出土状況



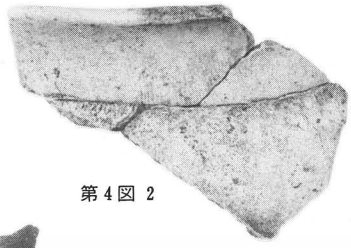
(1)　石庖丁出土状況

(2)　住居跡外甕出土状況

図版4



第4図 1



第4図 2

第4図24

第4図27

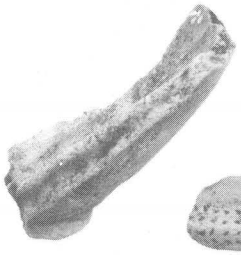
第4図28

第4図30

第4図32

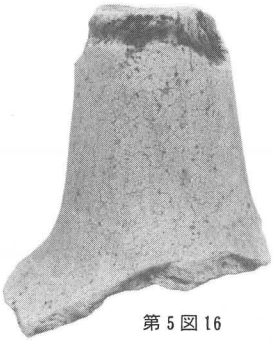
第4図29

第4図31



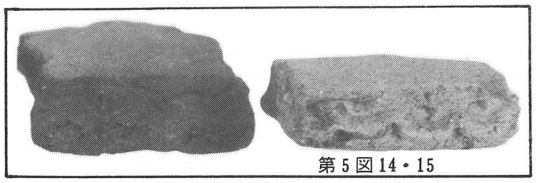
第4図32

第4図33



第5図16

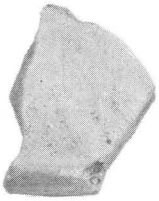
第5図17



第5図14・15

高杯口縁部拡大

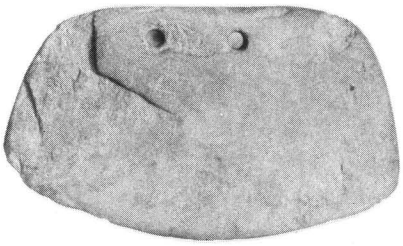
第5図19



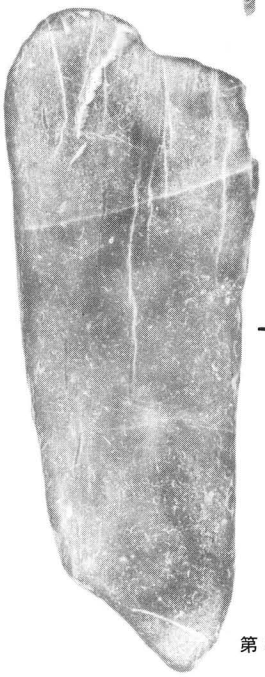
第5図18

住居跡出土土器（番号は挿図番号）

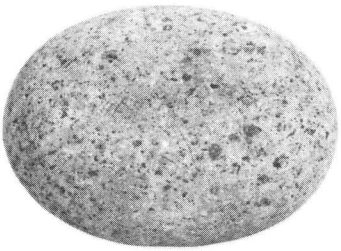
第6図



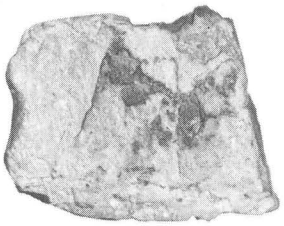
第5図23



第5図24



第8図



第11図

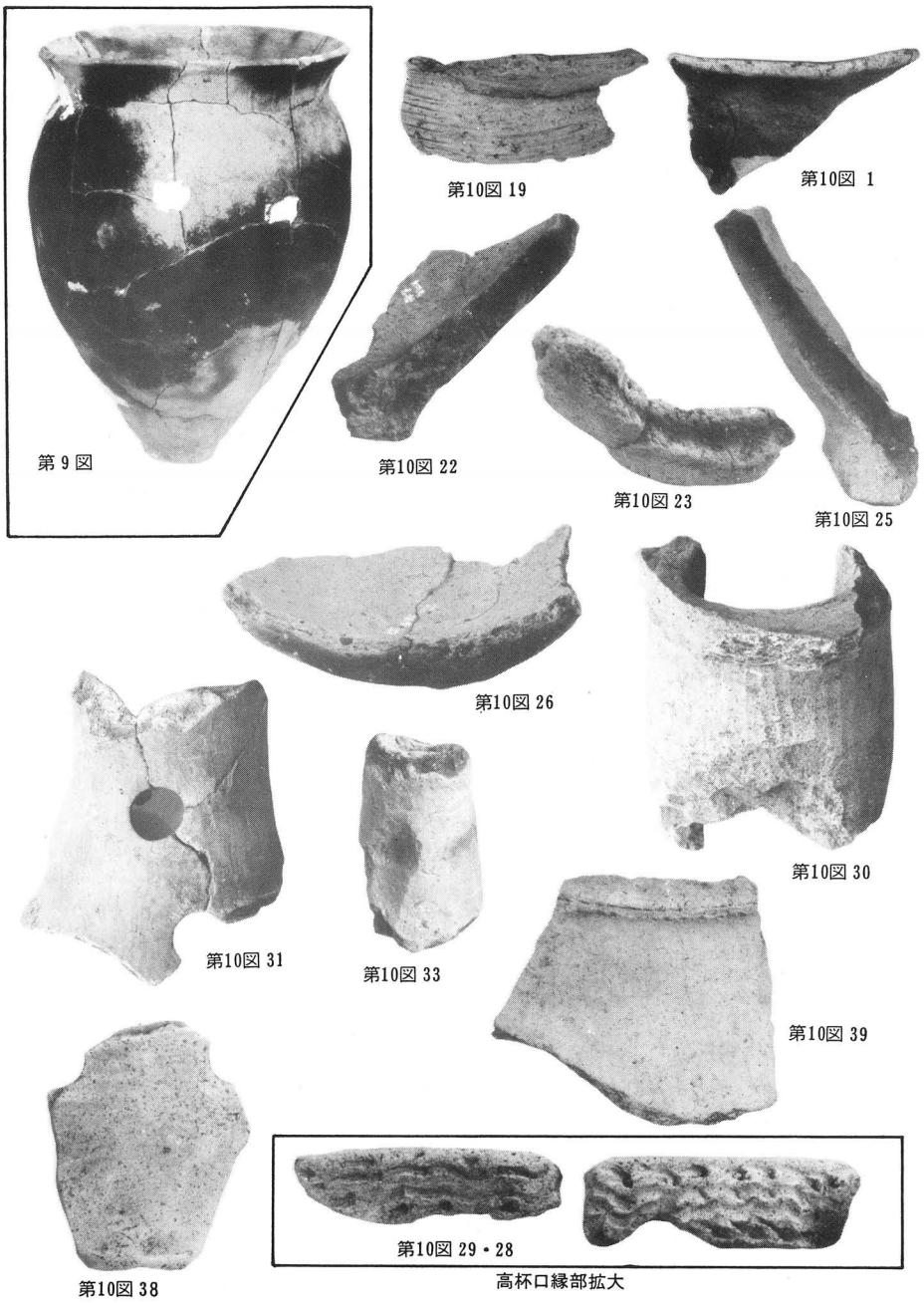
第5図22

第5図20

第5図21

住居跡・ピット状遺構出土遺物および表採石庖丁（番号は挿図番号）

図版6



住居跡周辺出土甕および表採遺物（番号は挿図番号）

東ノ原1号地下式横穴墓

HIGASHI NO HARU

例　　言

1. 本報告は県教育委員会が主体となって昭和51年度に行った東諸県郡国富町大字本庄4586ノ3に所在する東ノ原地下式横穴墓の緊急発掘調査の記録である。
2. 調査は昭和51年12月6日に実施し、文化課主事岩永哲夫，宮崎考古学会員田ノ上哲が担当した。
3. 本報告の執筆・編集は岩永哲夫が担当した。
4. 遺構実測図の方位は磁北を示している。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……40
Ⅱ　遺跡の位置と環境……41
Ⅲ　調査の結果
　1.　遺　　構……41
　2.　遺　　物……43
　　(1)　土　　器……43
　　(2)　鉄　　器……43
　　(3)　装　身　具……43
Ⅳ　結　　語……49

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……40
第２図　東ノ原１号地下式横穴墓遺構実測図……42
第３図　２号人骨にともなう副葬品(1)……44
第４図　２号人骨にともなう副葬品(2)……45
第５図　３号人骨にともなう副葬品……45

表　目　次

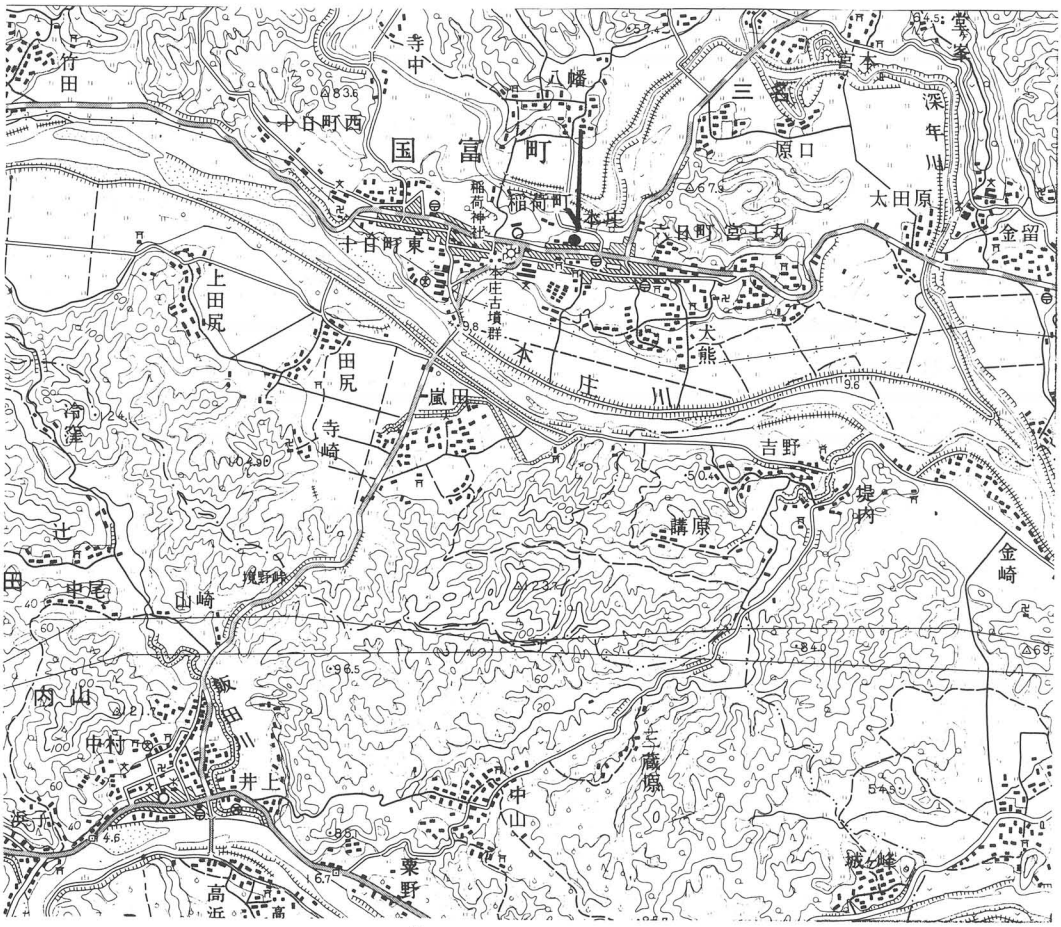
出土土器観察表 …… 46

図　版　目　次

図版 1　副葬品 (1)…… 51
図版 2　副葬品 (2)…… 52
図版 3　副葬品 (3)…… 53

Ⅰ、調査の経緯

宮崎県土木部が施行する宮崎～須木線の県道拡幅工事が東諸県郡国富町大字本庄において行われ、道路沿いの家屋は移転することになった。昭和51年12月６日、その移転後の宅地をバックホーにより整理していたところ、地下式横穴墓の竪坑部を破壊し、発見されたのがこの東ノ原１号地下式横穴墓である。副葬品の保全のこともあり、緊急に原状回復したいという地元の要請もあったので、同日午後、数時間という短時間で調査することになり、出土状況の写真記録などに不備のあったことは残念なことであった。調査には岩永と田ノ上　哲があたり、国富町教育委員会の協力を得て実施した。また、土地所有者柄本　章氏には種々御配慮いただいたことに感謝申し上げる次第である。



第１図　遺跡位置図

Ⅱ、遺跡の位置と環境

東ノ原１号地下式横穴墓は宮崎県のほぼ中央部・宮崎平野の西端に近い本庄台地上、東諸県郡国富町大字本庄字東ノ原（4586－３）に所在する（第１図）。本庄台地は砂岩と泥岩が互層をなす宮崎層群を基盤とし、第四紀洪積世の礫層部（諸県層群）、入戸火砕流（シラス層）が覆い、その上に霧島火山灰である日向ローム層が被覆している。地形的には、東諸県地方における低位段丘第１の面にあたり、大淀川の支流本庄川と深年川に狭まれた標高約40ｍの台地である。(注１)

この台地には昭和９年に指定された史跡本庄古墳群（前方後円墳17、円墳37、横穴２、地下式横穴墓１、計57基）が群在し、地下式横穴墓もまた高塚墳との混在状況の中で発見されてきた。しかし、古来、本庄町（旧）の中心として栄えてきた地域であるため、高塚墳にしても周囲の削平が顕著で、保存上の問題を抱えていることも事実である。東ノ原１号地下式横穴墓もこのような状況の中で発見されたもので、13号墳（観音山塚）・15号墳（東銚子塚）・18号墳（西銚子塚）・26号墳（てんの塚）などの前方後円墳や数基の円墳に取り囲まれての所在であった。

この台地での地下式横穴墓の初見は寛政元年（1789）、六日町における発見に遡る。(注２)以来現在まで総数31基を数えるに至っている。(注３)

Ⅲ、調査の結果

次に調査の結果を遺構・遺物に分けて述べる。

1. 遺　　構（第２図）

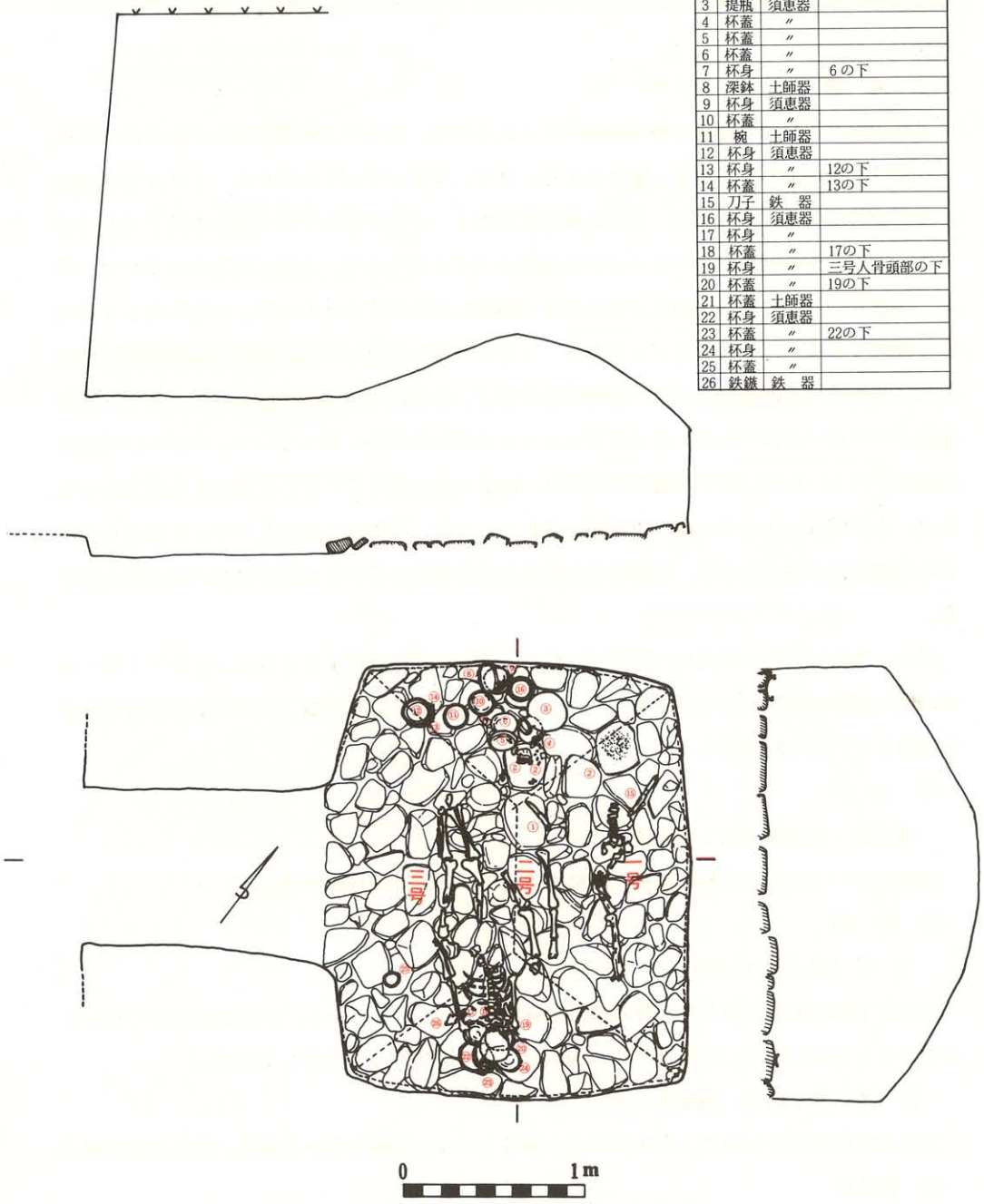
地下式横穴墓は竪坑、羨道、玄室から構成されるが、この内竪坑はバックホーにより完全に破壊されており、辛うじて羨門周辺が残っているのみであった。現地表から竪坑底までの深さは290㎝であった。遺構の主軸方位はN53°Ｅを示し、竪坑を南西、玄室を北東方向に構築している。

羨道は竪坑から直角に延び、一段（約10㎝）下がる。長さは140㎝、幅は羨門部で86㎝、中央付近で87㎝、玄門部で100㎝までゆるやかに広がっている。天井の高さはほぼ等しく、中央付近で87㎝を測る。閉塞の状況は不明である。

玄室は中央での長さ200㎝、幅243㎝の平入り寄棟造りの構造で、各辺ともやや膨らみをもった端正な方形プランをなし、ほぼ垂直に立ちあがっている。計測値は入口の辺225㎝、左辺170㎝、右辺185㎝、奥の辺217㎝を示す。天井の高さは120～125㎝である。棟はほ

副葬品一覧

番号	器種	種類	備考
1	刀子	鉄器	
2	管玉		碧玉製
3	提瓶	須恵器	
4	杯蓋	〃	
5	杯蓋	〃	
6	杯蓋	〃	
7	杯身	〃	6の下
8	深鉢	土師器	
9	杯身	須恵器	
10	杯蓋	〃	
11	椀	土師器	
12	杯身	須恵器	
13	杯身	〃	12の下
14	杯蓋	〃	13の下
15	刀子	鉄器	
16	杯身	須恵器	
17	杯身	〃	
18	杯蓋	〃	17の下
19	杯身	〃	三号人骨頭部の下
20	杯蓋	〃	19の下
21	杯蓋	土師器	
22	杯身	須恵器	
23	杯蓋	〃	22の下
24	杯身	〃	
25	杯蓋	〃	
26	鉄鏃	鉄器	



第2図　東ノ原1号地下式横穴墓遺構実測図

ぼ中央に位置し、約80㎝の長さを計測した。内部の状況は床面全面に河原石を敷きつめ、長軸方向に人骨３体が並び、人骨のそれぞれに副葬されたと思われる状況で土器・鉄器などが遺存していた。

2. 遺　物（第２図～第５図）

遺物の出土状態は人骨と密接な関係がみられるので、各々の人骨の状態とともに記述する。

人骨は３体が遺存しており、奥から１号，２号，３号と呼ぶことにする。１号人骨は左壁に頭位のある状態であったが、非常に遺存度が悪く、頭蓋骨はわずかな痕跡を残すのみであった。この人骨に副葬されたとみられる遺物は刀子１本のみで、左脇に添えられていた。なお、頭蓋骨の右側の管玉２個は２号人骨から移動したものと考えられる。２号人骨も１号同様左頭位であるが、上顎骨などが遺存し、１号より残りは良かった。副葬品は頭蓋骨と左壁の間に須恵器・土師器が置かれ、胸部付近に管玉、左脇に刀子１本がみられた。３号人骨は最も入口に近い位置にあり、右頭位でほとんどの部分が良好に残っていた。頭部には須恵器が副葬されていたが、多くは頭の下にあり、枕状に据えられていたことを示すものであった。また、左上腕骨の下から鉄鏃１本が検出された。なお、その他に開口した時に移動したとみられる須恵器が数点あるが、形態等から３号人骨に伴なっていたものではないかと考えられる。

以上、遺物と人骨の状況について記したが、人骨の遺存度が示すように、１号・２号・３号の順に追葬が行われたものと考えられ、この玄室構造を有する地下式横穴墓は複数体埋葬を意識していたものであろう。

⑴　土　器

須恵器・土師器（第３～５図）

詳細については出土土器観察表に記載するので、ここでは省略する。

⑵　鉄　器

刀　子（第４図３，図版２－５）

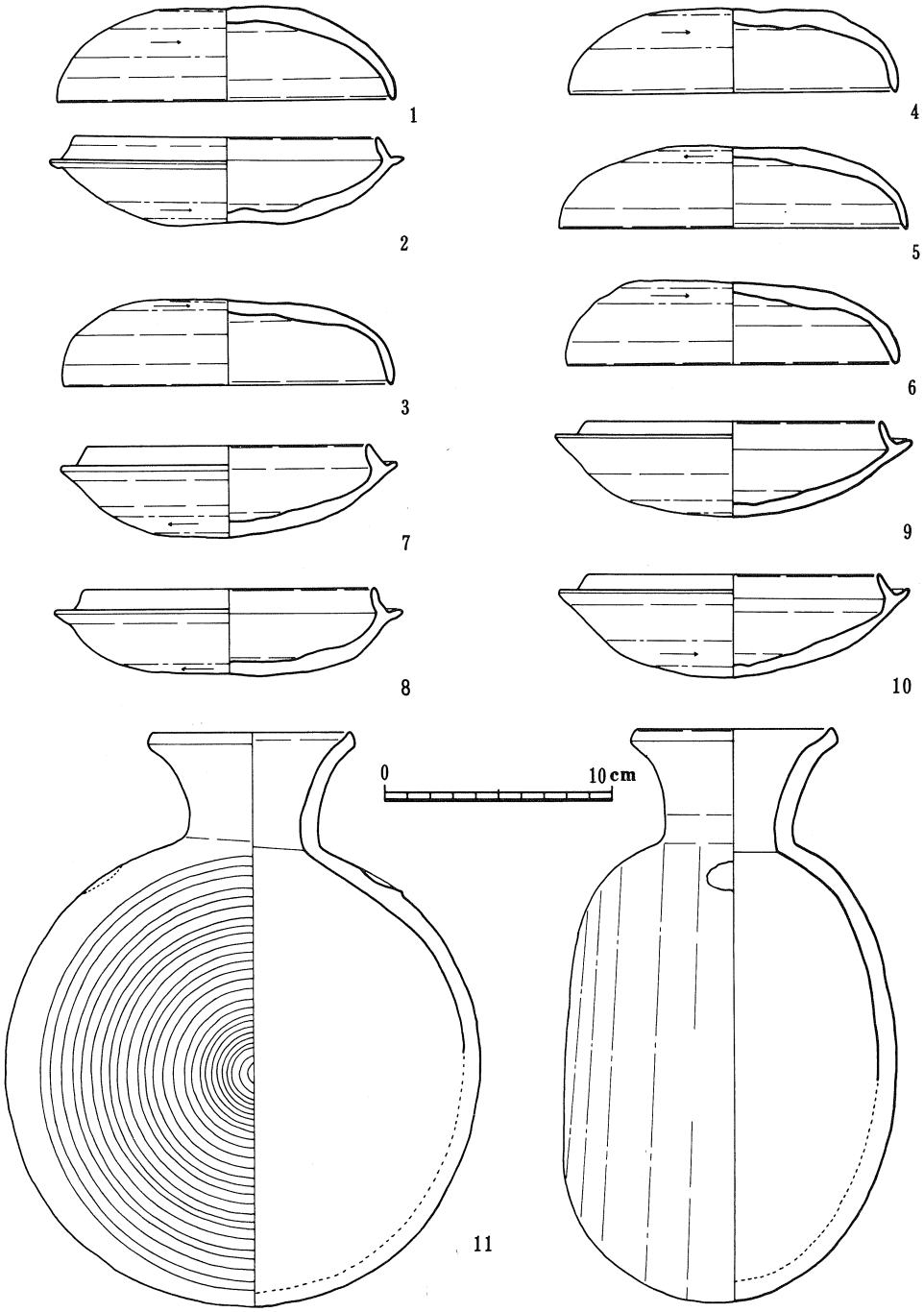
刀子は１号人骨および２号人骨の胸部左脇付近から出土している。３は２号人骨にともなうもので、全長18.6㎝、刃部長10.0㎝を測る。茎に鹿角が良く遺存している。

鉄　鏃（第５図14，図版３－６）

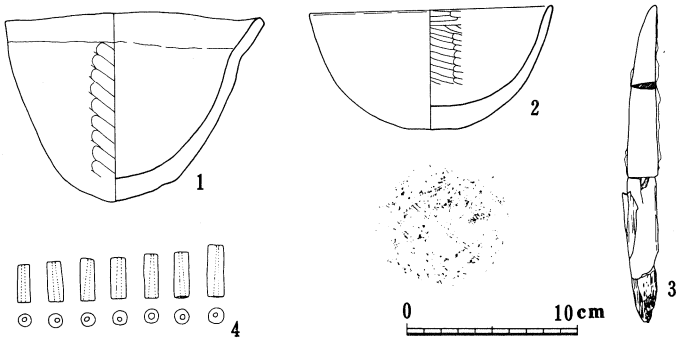
３号人骨に伴なうもので、全長12.2㎝、身長3.6㎝、身幅3.3㎝を測る。変形圭頭斧箭式。

⑶　装身具

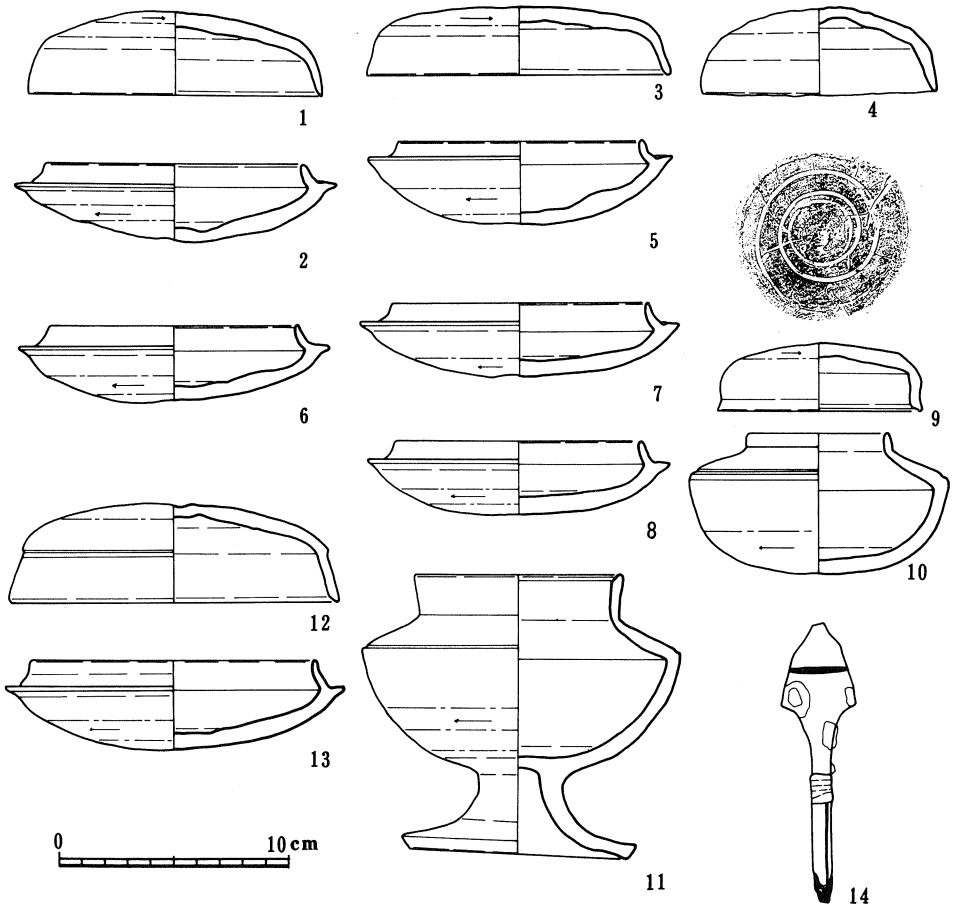
管　玉（第４図４，図版２－４）



第3図　2号人骨にともなう副葬品(1)　須恵器



第4図　2号人骨にともなう副葬品(2)　土師器・刀子・管玉



第5図　3号人骨にともなう副葬品　須恵器・土師器・鉄鏃

表　出土土器観察表

挿図 図版	遺物番号	器種	種類	副葬位置	法量(cm)	調整法及び特徴	備考
3－1 1－1	6	杯蓋	須恵器	2号人骨	口径 14.8 器高 4.0	マキアゲ、天井部はヘラケズリ、口縁端部は丸い。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	大きめの砂粒多い。 焼成良 青灰色 3－2とセット
3－2 1－2	7	杯身	須恵器	2号人骨	口径 13.3 受部径 15.6 器高 3.9	マキアゲ、底部はヘラケズリでやや窪む。立ち上がりは外反気味に内傾し、端部は薄い。 受部外面に明瞭な窪みをもつ。ロクロは左回転。内面中央に仕上げナデ。	やや大きめの砂粒 焼成良 暗灰色 3－1とセット
3－3 1－3	14	杯蓋	須恵器	2号人骨	口径 14.4 器高 3.8	マキアゲ、天井部はヘラケズリで中央は未調整。器体中位にわずかな窪みが回る。端部は丸い。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	大きめの砂粒 焼成良 青灰色
3－4 1－7	5	杯蓋	須恵器	2号人骨	口径 14.3 器高 3.7	マキアゲ、天井部はヘラケズリで中央に窪みがある。端部は丸い。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	やや大きめの砂粒 焼成良 青灰色
3－5 1－8	4	杯蓋	須恵器	2号人骨	口径 15.3 器高 3.6	マキアゲ、天井部は凹凸があり、ヘラケズリ、端部はやや外に開き、尖り気味。内面中央に仕上げナデ。ロクロは左回転。	大きめの砂粒 焼成良 暗灰色
3－6 1－9	10	杯蓋	須恵器	2号人骨	口径 14.4 器高 3.7	マキアゲ、天井部はヘラケズリ、全体に器形が歪む。端部は丸い。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	大きめの砂粒 焼成良 暗青灰色
3－7 1－4	9	杯身	須恵器	2号人骨	口径 12.3 受部径 14.6 器高 4.0	マキアゲ、底部はヘラケズリで、中心部未調整。立ち上がりは外反気味に内傾。口縁端部は厚目でやや尖る。ロクロは右回転。	大きめの砂粒を多量に含む。 焼成良 青灰色
3－8 1－5	16	杯身	須恵器	2号人骨	口径 12.7 受部径 15.1 器高 3.9	マキアゲ、底部はヘラケズリで、立ち上がりは外反気味に内傾し、端部は丸い。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	大きめの砂粒を多量に含む。 焼成良 青灰色
3－9 1－6	12	杯身	須恵器	2号人骨	口径 12.9 受部径 15.5 器高 4.2	右回転マキアゲ、外面は灰かぶり、付着物で調整不明瞭、立ち上がりは外反気味に内傾し、薄く仕上げている。	やや大きめの砂粒 焼成良 暗灰色
3－10 2－1	13	杯身	須恵器	2号人骨	口径 12.8 受部径 15.3 器高 4.6	マキアゲ、底部はヘラケズリ、立ち上がりは外反気味に内傾し、端部は薄く仕上げている。ロクロは左回転。	少量だが大きめの砂粒を含む。 焼成良 青灰色
3－11 1－10	3	提瓶	須恵器	2号人骨	口径 8.6 器高 25.3 胴部径 20.9 胴部幅 14.6	把手の痕跡が残る。胴部の前面は細かいカキ目があるが、中央付近は摩滅している。背面はヘラケズリ、頸部の継ぎ目で色調が明瞭に変わっている。	やや大きめの砂粒 焼成良 灰色

挿図 図版	遺物番号	器種	種類	副葬位置	法量(cm)	調整法及び特徴	備考
4－1 2－2	8	鉢	土師器	2号人骨	口径 13.8～14.8 器高 11.0	輪積み、胴部は斜めにヘラケズリ成形をし、口縁部はナデ。内面では輪積みの状況がよく観察でき、調整は雑、全体形もいびつである。	大きめの砂粒を多く含む。 焼成良好 にぶい橙色
4－2 2－3	11	椀	土師器	2号人骨	口径 14.2 器高 7.0	外面は斜めにていねいなヘラケズリを行い、底部に×のヘラ記号を付している。内面も細かなヘラケズリで調整している。	砂粒を多く含む 焼成良好 明赤褐色
5－1 2－6	18	杯蓋	須恵器	3号人骨	口径 12.8 器高 3.6	マキアゲ、天井部はヘラケズリで肩部から口縁部にかけてヨコナデ、端部は尖っている。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	砂粒少なく、胎土良好 焼成良好 明青灰色 5－2とセット
5－2 2－7	17	杯身	須恵器	3号人骨	口径 11.2 受部径 14.0 器高 3.4	マキアゲ、底部ヘラケズリで、中央にヘラキズあり。立ち上がりは外反気味に内傾している。端部は薄く仕上げ、やや尖り気味。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 灰色
5－3 2－10	23	杯蓋	須恵器	3号人骨	口径 13.2 器高 3.0	マキアゲ、天井部は平たくヘラケズリを行い、ヘラキズあり、肩部から口縁部にかけヨコナデ。端部は尖り気味。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 灰色
5－4 2－12	20	蓋	須恵器	3号人骨	口径 10.1 器高 3.9	マキアゲ、天井部はヘラケズリだが、未調整。口縁端部は尖り気味に仕上げている。 内面中央に仕上げナデ。	砂粒少ない 焼成良好 暗青灰色
5－5 2－11	19	杯身	須恵器	3号人骨	口径 10.6 受部径 13.2 器高 3.6	マキアゲ、底部はヘラケズリで、中央にヘラキズあり立ち上がりは外反気味に内傾している。端部は薄く仕上げ、やや尖っている。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 青灰色
5－6 2－8	24	杯身	須恵器	3号人骨	口径 10.7 受部径 13.5 器高 3.3	マキアゲ、底部はヘラケズリ、中央にヘラキズあり。立ち上がりは外反気味に内傾している。端部は丸い。内面中央に仕上げナデ。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 灰色
5－7 2－9	27	杯身	須恵器	3号人骨	口径 11.2 受部径 13.9 器高 3.2	マキアゲ、底部はヘラケズリ、中心付近にヘラキズ。立ち上がりは外反気味に内傾し、端部は丸いが、尖り気味。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 暗青灰色

挿図 図版	遺物番号	器種	種類	副葬位置	法量(cm)	調整法及び特徴	備考
5－8 2－13	28	杯身	須恵器	3号人骨	口径 10.8 受部径 13.1 器高 3.2	マキアゲ、底部はヘラケズリ、中心にヘラキズあり。立ち上がりは外反気味に内傾している。端部は尖り気味。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 青灰色 中に朱玉（径3～3.5cm）を2個入れている。
5－9 3－4	25	蓋	須恵器	3号人骨	口径 8.8 器高 3.0	マキアゲ、天井部はヘラケズリを行い、渦巻き状の沈線がみられる。口縁端部は外反し、内面に沈線をめぐらす。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 青灰色 天井部に朱の付着 No.29の短頸壷とセット
5－10 3－3	29	短頸壷	須恵器	3号人骨	口径 6.0 最大径 11.2 (肩部) 器高 6.2	マキアゲ、底部はヘラケズリ、中央にヘラキズあり。肩部上下に各1本の沈線をめぐらすが、上部が明瞭。口縁端部はややふくらみをもち、丸い。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 灰色 No.25が蓋として使用されていた痕跡を残している。
5－11 3－5	30	脚付壷	須恵器	3号人骨	口径 8.9 最大径 13.8 底径 9.4 器高 12.2	マキアゲ、底部はヘラケズリ、他はヨコナデ、口縁端部は丸いが、内側に1条の沈線をめぐらしている。肩部の上位にも一条の沈線をめぐらす。脚部はゆるやかに広がりながら、脚端へ至る。ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 灰色
5－12 3－1	21	杯蓋	土師器	3号人骨	口径 14.2 器高 4.3	マキアゲ、天井部はヘラケズリ、中央にヘラキズあり肩部に稜をつけ、外開きに端部へ至る。端部は丸い。ロクロは右回転。	砂粒を含む 焼成良好 「赤焼き」 黄橙色
5－13 3－2	22	杯身	須恵器	3号人骨	口径 12.4 受部径 14.8 器高 3.9	マキアゲ、底部はヘラケズリ、中央にヘラキズあり。立ち上がりは外反気味に内傾している。端部は丸い。内面中央に仕上げナデ、ロクロは右回転。	砂粒少なく胎土良好 焼成良好 「赤焼き」 橙色

2号人骨の胸部上位付近に散乱していたもので、7個検出した。長さは2.2㎝から3.0㎝、幅は0.7㎝から1.0㎝のものまであり、穿孔は一方向からである。碧玉製。

Ⅳ、結　　語

本庄台地上で調査された地下式横穴墓の数は現在までに総数31基に達している。これらは寛政年間にはじまる極めて長期的な発見の経緯をもっており、いずれも玄室天井部の陥没等の偶然発見という単発的な事件によるもので、群としての意識をもって調査された例はない。この31基を地域別に分けると、六日町地区（2基）、宗仙寺地区（11基）、祝子園地区（2基）、南神ノ原地区（2基）、北神ノ原地区（10基）、十日町地区（2基）、上馬場地区（1基）、東ノ原地区（1基）のようになる。(注4) しかし、群構成の実態を明らかにするためにはそれぞれの位置が不明確なものが多く、細かなグルーピングは難しい。

東ノ原1号地下式横穴墓を構造的にみると、玄室は寄棟造りの天井形をもつ方形プランをなし、福尾氏分類のⅡ－B類に属する。(注5) 床面には一面に河原石による敷石を行い、屍床を設けず、奥から順に3体を追埋葬していったものとみられる。このことは人骨各々に副葬された遺物の違いによっても、また、人骨の遺存度からも明らかである。この構造は追葬を考慮したものであり、単体埋葬を基本とする妻入り長方形プランを営んだ時期とは葬送観念の違いがみられ、えびの市周辺に営まれた平入り方形プランの地下式横穴墓あるいは、日向型といわれる横穴墓などとの関連が考えられる。敷石方形プランの構造は国富町に限っていえば、祝子園2号、市ノ瀬1号にもみられ、時期的に大差はないと思われる。この構造を有する地下式横穴墓では多くの場合、土器類（須恵器・土師器）を伴なうことも特徴的である。東ノ原1号における土器類はかつて調査された地下式横穴墓の中では最も多く、須恵器23点、土師器3点が副葬されていた。小田富士雄氏による須恵器編年のⅢb からⅣa にあたるものとみられ、6世紀後半から末頃の時期が与えられよう。

最後に三財川と本庄川に狭まれた国富町中央部における地下式横穴墓の立地上の問題点についてふれておきたい。両河川に狭まれた地域には広範な面積をもつ五ケ所の台地と大小2ケ所の丘陵がある。まず、台地についてみると、元知原地下式横穴墓の所在する台地、井ノ水・大坪地下式横穴墓の所在する台地、市ノ瀬・高田原地下式横穴墓の所在する台地、六野原地下式横穴墓の所在する台地、飯盛地下式横穴墓の所在する台地である。これらの台地上での分布状況はいずれも共通して台地の両端部または片側端に所在し、中央部に空閑地（畑作地帯）を得ている。また、二つの独立丘陵では丘陵全域を墓域として使用し、周囲に水田

農耕地を控えた状況を示している。集落がどの位置にどのように所在していたかは不明であり、問題を残すにしても、それぞれ生産基盤になる土地を確保した上での土地利用を行っていることは理解できよう。これらは、各地下式横穴墓を営んだ人々の生産形態、各集落間の関係および構造を明らかにする上で一つの課題を提示しているように思われる。

注 1. 国富町教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」国富町文化財調査資料第 3 集　1984。

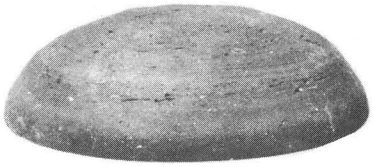
注 2. 桂川忠良「桂林漫録」　1800.

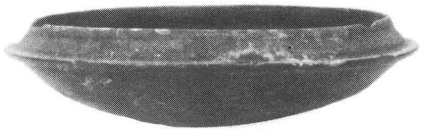
注 3. 注 1.に同じ。

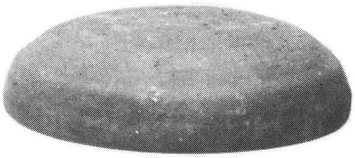
注 4. 注 1.に同じ。

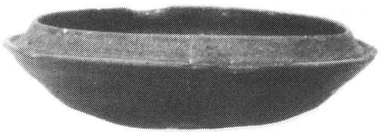
注 5. 福尾正彦「日向中央部における地下式横穴とその社会」古文化談叢第 7 集　1980。

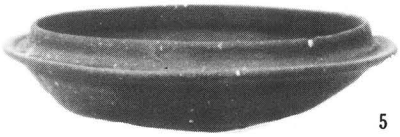
図版1 副葬品(1)


1

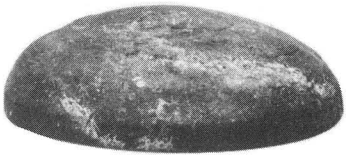

2

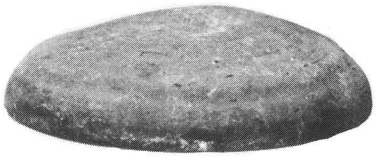

3


4


5

6

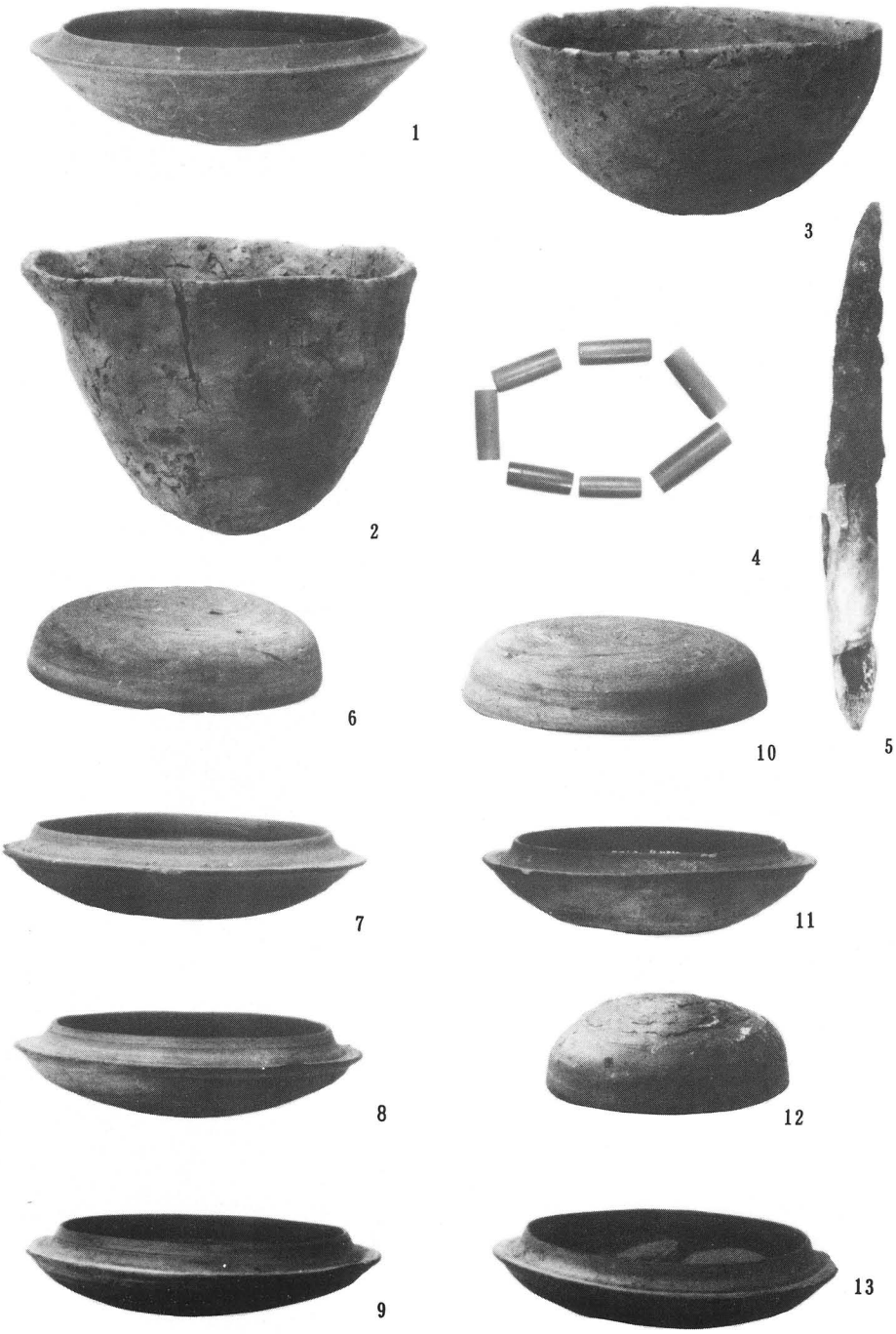

7


8

9

10

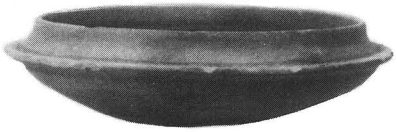
図版2 副葬品(2)



図版3 副葬品(3)

1

3



2

4

3

5

6

（付）　昭和58・59年度埋蔵文化財発掘調査一覧

（昭和60年２月　現在）

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	下田畑遺跡	清武町大字木原	59. 4. 4 ～ 59. 6. 30	県教委	北郷泰道 日高孝治	掘立柱建物・カマド付竪穴住居 竪穴住居（弥生） 溝・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	
2	小山尻東遺跡	〃	〃	〃	長津宗重 近藤　協	集石遺構 竪穴住居 縄文土器 土師器	
3	田上遺跡	〃	〃	〃	菅付和樹 谷口武範	集石遺構 縄文土器	
4	小山尻西遺跡	〃	〃	〃	近藤　協	板碑・土師器 石器	
5	下屋敷遺跡	新富町大字 上富田字下屋敷 7498－2	59. 4. 17 ～ 59. 7. 11	新富町教委	有田辰美	須恵器 墨書土器	
6	札ノ元遺跡 芳ケ迫第２遺跡 芳ケ迫第３遺跡	田野町字芳ケ迫甲9335 字札ノ元甲9268他	59. 5. 7 ～ 59. 12. 19	田野町教委	寺師雄二	集石遺構 縄文土器 陶磁器・石器	
7	上野遺跡	西都市大字穂北字上野4458－2	59. 5. 14 ～ 59. 6. 4	西都市教委	日高正晴	弥生土器・石器	
8	菓子野地下式横穴	都城市菓子野町 9457－1	59. 5. 24 ～ 59. 6. 2	都城市教委	矢部喜多夫	人骨・鉄器 刀子・鹿角製剣	
9	久木野地下式横穴	高岡町大字 浦之名4959－2	59. 5. 29 ～ 59. 5. 30	高岡町教委	永友良典	人骨・土師器 刀子・小玉	
10	西ノ原遺跡	宮崎市大字熊野字西之原6742	59. 6. 4 ～ 59. 9. 8	宮崎市教委	野間重孝	縄文土器 土師器 須恵器・土製品 石器・鉄器	
11	越シ２号遺跡	日向市大字日知屋字越シ11561 11562・外６ケ所	59. 6. 6 ～ 59. 11. 10	日向市教委	緒方博文	縄文土器・弥生土器・土師器・陶器・磁器	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
12	出水山遺跡	国富町大字森永字出水山 2964～1・2	59. 6. 12 ～ 59. 8. 6	国富町教委	面高哲郎 永友良典	城址 土師器 陶磁器・銭	
13	東平下A遺跡	川南町大字川南字東平下 19049～1	59. 7. 2 ～ 59. 7. 4	川南町教委	面高哲郎		確認調査
14	平畑遺跡	宮崎市大字熊野7710	59. 7. 5 ～ 59. 10. 26	宮崎大学	日高孝治 菅付和樹	縄文土器 弥生土器 土師器・石器	
15	富田古墳群(鐙地区所在の古墳について)	新富町大字三納代2181	59. 7. 19 ～ 59. 7. 26	新富町教委	有田辰美	弥生土器	確認調査
16	園田遺跡	新富町大字三納代2188外8ケ所	59. 7. 27 ～	新富町教委	有田辰美	住居址 弥生土器	
17	篠ケ城遺跡	日南市大字吉野方字篠ケ城 10955外6ケ所	59. 7. 23 ～ 59. 7. 27	日南市教委	面高哲郎	縄文土器 弥生土器 土師器・石器	確認調査
18	志和池古墳群	都城市下水流町 2576－1	59. 7. 24 ～ 59. 8. 1	都城市教委	矢部喜多夫	地下式横穴 人骨・土師器 須恵器・鉄剣	
19	市ノ瀬地下式横穴	国富町大字深年 5023～2	59. 7. 25 ～ 59. 8. 2	国富町教委	長津宗重 日高孝治	人骨・土師器 須恵器・鉄器	
20	石神遺跡	宮崎市山崎町下原975－1	59. 8. 6 ～ 59. 8. 10	県教委	北郷泰道 近藤協	弥生土器 軽石	確認調査
21	川床遺跡	新富町大字新田15114外	59. 8. 15 ～ 60. 1. 31	新富町教委	有田辰美	周溝墓・土壙墓群・鉄鏃・環頭柄頭・須恵器 土師器・刀子・鏡	
22	梅ノ木原遺跡	高千穂町大字三田井4784－3～4795－1	59. 9. 3 ～ 59. 9. 27	高千穂町教委	長津宗重	縄文土器 弥生土器 石器	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
23	保木下遺跡	宮崎市大字 島之内字保木下 2380	59. 9. 5 ～ 60. 1. 22	県教委	面高哲郎 近藤協	水田址 弥生土器 陶磁器 石器（弥生）	
24	赤木遺跡	延岡市舞野町	59. 9. 17 ～ 59. 9. 22	延岡市教委	永友良典	土師器・須恵器 石器（旧石器）	確認調査
25	寺原第2遺跡	西都市大字三宅 3720－5 3720－9 〃 －6 〃 －12 〃 －7 〃 －20	59. 9. 25 ～ 59. 10. 5	西都市教委	日高正晴	住居址 土師器・須恵器 陶器・石器	確認調査
26	檍遺跡	宮崎市吉村町 江田原甲265－1	59. 10. 1 ～ 59. 10. 2	宮崎市教委	伊東但		確認調査
27	鬼付女西遺跡	新富町大字 上富田字鬼付女 8758－1	59. 10. 11 ～ 59. 11. 30	県教委	永友良典 日高孝治	竪穴住居跡・周溝状遺構・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器	
28	新村遺跡	西諸県郡野尻町 大字紙屋 808－3番地	59. 11. 8 ～ 59. 11. 9	県教委	北郷泰道		確認調査
29	寺原第3遺跡	西都市大字 三宅3709－4	59. 12. 3 ～ 59. 12. 7	西都市教委	日高正晴		
30	南中原遺跡	児湯郡高鍋町 大字上江 字南中原	60. 1. 21 ～ 60. 2. 1	県教委	永友良典	堀立柱（中世） 土壙（古墳） 土師器	確認調査

宮崎県文化財調査報告書

第２８集

昭和６０年３月

発　行　　宮崎県教育委員会

編　集　　宮崎県教育庁文化課